

ロゴス・マントラ・
テウルヒア

LOGOS MANTRAM TEURGIA

サマエル・アウン・ベオール

第1章

ロゴス

インヴォケーション ―― 聖霊

ヨハネ、という名の男を我々は知っている。なんと、彼はすぐれた魔術師であった。そしてアストラル体を思いどおりに離脱させる術を心得ていた。

静寂に満ちた平和なある夜のことであった。魔術師ヨハネは肉体を離れて聖霊を呼ぶと、突然、一羽のすばらしい鳥が頭上にうやうやしく浮かび出てきた。それは長い白髭を蓄え、神々しい老人の顔をした、喩えようもないほどまっ白な白鳩だった。神々しい老顔容かんばせをもったその鳩の大きさ、美しさ、高貴さは、見る者を感嘆させずにはおかなかった。白鳩はヨハネの友人の肩に止まって、ささやくように何か忠告を与えたが、その後、ヨハネの前に立った。我々の善良な使徒は恍惚感に満たされながら聖霊に訊ねた。

「わが主よ！ おお、わが神よ！ 答えて下さい。今の私はいかがでしょうか？……今の私で良いのでしょうか？」

白鳩は一人の崇高な人物の姿をとって現れ、愛に満ちて語った。

「息子よ、お前はかんばしくない状態である」

ヨハネは驚いてもう一度訊ねた。

「主よ、答えて下さい。どうして私が良くないのかを」

聖霊は次のように答えた。

「私は病んでいる一人の女を治療しているが、その女はお前の世話になっている。しかしお前がその人を治しているのではない。彼女を治療しているのは私である。しかもなお、お前は彼女から金銭を取り立てているではないか！ お前が受け取っている報酬は返さなければならない。それには、多大な犠牲が支払われているのだ！」

ヨハネは驚いて返答した。

「主よ、もし私がお金を返せば、正しい道に戻れるでしょうか？」

尊い老人は答えた。

「そうだ。そうすれば、お前はよい状態、非常によい状態になるであろう」

聖霊と第三ロゴス（ビナー）

ヨハネははかりしれない愛に満たされて、その神々しい老人を抱擁した。老人はヨハネに祝福を与えて去っていった。魔術師ヨハネはその老人が自分自身の聖霊であることを、そしてビナー（Binah）、第三ロゴスであることを知っていた。疑いなく、人はみな言語に絶するほど神聖な白鳩を自分自身の内に宿している。

ロゴスとは完全なる複合統一体である。

聖霊は第三ロゴスである。

第三ロゴスの驚異的な力は全宇宙に貫通している。

私たちは第三ロゴスによって創造されたのである。

第三ロゴスのエネルギーの解放

人類は自分自身の奥底にある動物的な暗闇から、第三ロゴスのエネルギーを解放しなければならない。そしてそのエネルギーを火の奔流に変換し、「内」と「上」に向けて逆流させなければならない。クンダリーニは脊髄の中央管を通して頭頂まで上昇する。それは第三ロゴスの創造エネルギーである。

第二ロゴス（ホクマー）

別の夜、ヨハネは肉体を捨ててアストラル体で外に出た。そのとき、肉体の外で、彼は自分の乗り物、すなわち七つの体から脱したのであった。これは崇高なエクスタシーを通してのみ可能である。

ヨハネは、カバリストたちの間でホクマーとして知られる彼自身の「架け橋としての第二原理」に向かって行った。これは複合統一体の、第二ロゴスである。



金星のイニシエーション

洗礼者ヨハネがイエスに洗礼を授けているところ。頭上の鳩がイエスの霊の中に入ったキリストを象徴している。金星のイニシエーションとは、聖なるキリストと人間の霊との一体化を意味する。

金星のイニシエーションでの体験

そのような永遠の至福状態で、ヨハネは聖なるマスターがヨルダン川で受けた金星のイニシエーションを学ぼうとした。その結果は信じられないほど驚くべきものだった。ヨハネは自分自身がイエス・キリストに変容するのを覚えた。自分がイエス・キリストになっているのを感じたのである。そして洗礼者ヨハネの前にやって来た。そこですばらしい寺院の中に入って行った。その寺院はヨルダン河畔に位置する洗礼の寺院であった。ヨハネはイエス・キリストに変貌し、それゆえ洗礼者ヨハネの前にやって来たのである。この偉大なる先駆者はヨハネにチュニックを脱ぐように命じ、ヨハネはそれに従った。そのとき、彼は自分自身がイエス・キリストであるという絶対的な確信を持っていた。そこには疑いという原子は一つもなかった。

洗礼者は司祭のチュニックを着ていた。彼は戸棚のようなものを開けたが、その中には聖杯が二個あった。それぞれに油とワインが入っていた。洗礼者はオリーブ油のびんを取り出し、イエスに変貌していたヨハネに奥の聖所へ入るように命じた。そこで彼はヨハネの頭に純粋な油を注ぎ、頭上に水を振りかけた。まさにこの瞬間、頭の上部に位置する松果腺を通して、光輝く智慧のドラゴン、内なるクリストがイエスの中に入ったのである。そのとき、父の太陽（第一ロゴス）、子の太陽（第二ロゴス）、聖霊の太陽（第三ロゴス）が無限の空間に輝いていた。

イエス・クリストへの変貌

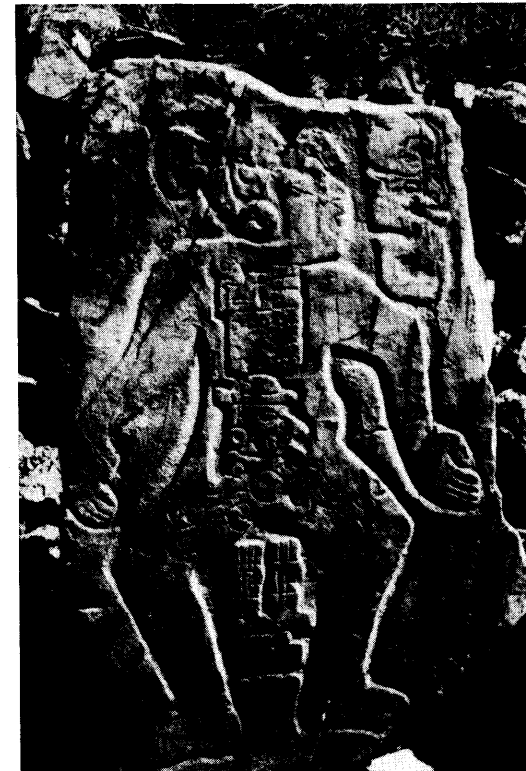
その驚くべき「神性」、内なるクリストは、イエスの内なる乗り物の中で巨大で絶対的な純白さをもって輝いていた。司祭はすぐさま、イエスにある特別な椅子に腰掛けるよう命じた。この瞬間からイエスはイエス・クリスト（キリスト）と呼ばれるようになったのである。

ヨハネがそのような深いエクスタシーの状態から戻ったとき、第二ロゴスの世界、クリストの世界には個性もパーソナリティも「我」も存在しないということを理解した。主の世界では我々はみな、絶対的に「一」なる存在である。第二ロゴスの世界は中心太陽である。

日の老いたる者、第一ロゴス

またある深閑とした夜、ヨハネは目覚めから眠りへと移っていくその瞬

間を利用した。彼は寢床から起き上がった。まさにそのとき、アストラル体が肉体から離脱したのである。ヨハネは喜びと幸福を感じながらアストラル体で旅をしていた。すると、南極大陸の方向へ引き寄せられるのを感じた。彼はアストラル界を華麗に飛んで、南極の氷河地帯までやって来た。そこで無限に広がる空間へと目を向けたとき、一つの星が栄光に包まれて輝いているのが見えた。そしてその星がまばゆいばかりの光を放って、確かに自分を呼ぶのを感じた。ヨハネはその星のところまで飛んで行った。そこで、その星が日の老いたる者、秘密にまします父、彼自身の尊敬すべき長老であることを知ったのである。



日の老いたる者

メキシコのモンテ・アルバンにある“踊る人”。生殖腺の部位に太陽と“日の老いたる者”の顔が描かれている。我々の性エネルギーは太陽エネルギーから来ている。その性エネルギーを昇華することにより、ついには、太陽人間、つまり“日の老いたる者”に変身する。

実際、我々一人ひとりが意識の奥底に尊敬すべき長老を持っている。それが第一ロゴスである。カバリストたちはそれをケテルと呼んでいる。

その良き長老はヨハネの霊の中に入り、ヨハネは自分自身が変換されるを感じた。そして、自分自身のオーラが巨大に広がって地球全体を飲み込むのを覚えた。そのとき魔術師は歩を進めながら、言葉では到底表現しようもないほどの幸福感にひたっていた。

ヨハネが肉体に戻ったとき、第一ロゴスの世界には個性もパーソナリティーもなく、優「我」、劣「我」など、どのような類いの「我」も全く存在しないことを理解した。

聖なる四

光輝く智恵のドラゴンは生命の冠であり、それはインティモ、モナドから発せられる光線である。光り輝く智恵のドラゴンは三位一体より成っている。

ヨハネは「一」の中の三位一体が聖なる四、テトラグラマトンを形成しているということを書物で知っていた。しかし完全に理解するには至らなかった。彼の理解力の及んだのは三位一体までで、何かが欠けていた。彼はそれを補って、聖なる四を理解したかったのである。

アイン・ソフ

また別の夜、ヨハネはエクスタシーに満たされ、すべての欲望、すべての思考、すべての意志、すべての意識、すべてのイデオロギー、すべての先入観を捨て、氣息のように松果腺を通して肉体の外に出た。そのとき自分が、言い表わせないほどすばらしい、汚れなき神聖な白い一つの原子に変容するを感じた。その原子はアイン・ソフである。

言葉にならないほどすばらしいその原子は、父と子と聖霊を放射する。宇宙の偉大なる夜が来るとき、すべての人々の光り輝く智恵のドラゴンはアイン・ソフの内部へ吸収されるであろう。そこで三位一体は「一」に吸収されるのである。

そこには聖なる四、カバリストたちのテトラグラマトンがある。

アイン・ソフの高次の存在たち

ヨハネはエクスタシーの状態で次のことを理解した。それは奥深いとこ

ろにおいて、我々一人ひとりが無限空間の一つの星であるということ、そして観念的かつ絶対的空間のすばらしい超神聖な一つの原子であることを知ったのである。

忽然と、ヨハネは星が散りばめられている宇宙空間の無言の中に、神聖なる寺院が存在しているのを見つけた。彼は寺院の中に入って行った。そこには数人のノスティック大司教がいた。ヨハネはコスミック・イニシエーションの正確な日付を知る必要があったので、彼らの一人に訊いた。その質問は許可され、正確な答えを得ることができた。次に、人類の運命について、そして彼自身のネメシス（カルマ）について二、三の質問をした。偉大なるノスティック大司教、神聖で尊敬すべき長老は次のように答えた。

「我々にとって、人間のマインドの全活動は、汝らにとっての鉱物界の活動のようなものだ。人間のマインドを調べるときは、鉱物を調べるようなものである」。

ヨハネは驚愕した。実際、アイン・ソフの世界に住む彼らは、我々にとってすべての理解を超越している。それらの存在者たちはもはや人間界に属していないし、天使界、セラフィム（熾天使）界、パワーズ（能天使）界にさえも属していないのである。

偉大なる存在たちの降臨

我々の友人の一人が、これらのことに関して、次のように述べた。

「もし、言語に絶する高次の存在者たちが、先ほど言ったような高次の世界の、観念の世界に住んでいるとしたならば、その神聖な雰囲気の中で至福に満ちて恍惚としているために、我々を理解できないのではないだろうか。また、彼らの超物質が我々の物質とは相容れないために、我々人間の世界にまで降りてくるのは絶対不可能ではないだろうか」。

その時、我々はその友人に次のように答えなければならなかった。

「確かに、それぞれの生物は各々自分の環境の中で生きている。魚は水中に住み、鳥は大気中に住み、人間や大地をはう動物は土ぼこりの中に住んでいる。火の中にはサラマンダーが住んでいる。奈落には暗黒の怪物がいる。表現不可能なほどすばらしい世界である意識の高次層には、神聖なヒエラルキーが存在する。人間のモナドは、以前は蟻、爬虫類、鳥類、四足獣であった。人間が再び蟻、爬虫類、鳥類、四足獣に戻ることは不可能だろう。人類はその進化のプロセスを経てしまったために、戻ることはで

きないのである。アイン・ソフの世界の言語に絶する存在たちも同様に、人間の状態にまで戻ること、帰することも全く不可能である。それは人類が蟻に再び戻るようなものだ。しかし時として、それらの光の存在者たちの何人かが人類を助けるために高次元から降りて来ることがある。彼らは偉大なるアバターたちであり、大昔の夜明けの時代から人類を見守ってきた偉大なる改革者たちである。実際、我々は見捨てられているのではなく、ここ地球には人類のために働く偉大なる白ロジが存在する」。

ロゴスとクンダリニーの具現

極めて重要な仕事の一つがある。それは我々自身の内部にロゴスを具現することである。超越的なこととは、金星のイニシエーションを達成することである。そしてその問題は完全に性的であるということを理解しなければならない。

人類一人ひとりがクンダリニーを目覚めさせなければならない。その創造エネルギーを「内」に、そして「上」に戻す必要がある。その創造エネルギーがエーテル体に達したとき、これは霊を着飾る衣装に変換される。そしてアストラル体まで上昇したとき、チャクラが目覚め、その人物は真の魔術師に変貌する。さらにメンタル体まで達したとき、マインドの力が目覚める。そのようにして人間のマインドはマインド・クリストへと変化するのである。

創造エネルギーが、コーザル体、神智学で言うマナスまで上昇したとき、人間の意志が意志クリストに変換される。そして意識体（ブッディ体）まで上昇したとき、クリスト意識が生まれる。もし第三ロゴスの創造エネルギーがインティモにまで上昇したならば、我々は創造する神々となる。そしてクリストを具現するための準備が整ったことになるのである。

このようにして言葉は肉となる。

そのための秘密の鍵が「アルカーノ A. Z. F.」である。男根と女陰の結合の中にマグナム・オプス（偉大なる作業）の鍵がある。重要なことはエンス・セミヌス（精液の本質）を消耗しないことである。そのようにして性エネルギーの昇華が達成される。そのようにしてクンダリニーが目覚めるのである。脊髄の火はエホヴィスティック（エホヴァ的）であり、ハートの火はクリスティックである。そして眉間には父の光線が輝いている。

それゆえ性エネルギーをハートにまで昇華しなければならない。そこに

は第二ロゴス、インティモ・クリストが存在するからである。

上にあるものは下にあるものへ入らなければならない。それは下のものが偉大なる光の世界に戻るためである。そしてグラン・オブラ（偉大なる作業）の根源の原料を用いて働き、その根源の原料であるクリストの精液をハートにまで昇華しなければならない。それは第三ロゴスの創造エネルギーが「上」へ、偉大なる光の世界へと上昇することを可能にするためである。

それが唯一、魔術師となる方法である。

* * *

第2章

マントラ

ユニヴァーサルな響き

すべての動きは、本質的に音と同じである。動きがあるところには、必ず音が存在する。人間の聴覚は、ある限られた大きな振動しか知覚することができない。それにもかかわらず、これらの振動の上にも下にも多重に響きわたる波動が存在する。それらを人間の聴覚は捕らえることができない。海の魚は固有の音を生じさせ、蟻は我々の聴覚では知覚できない音を使って互いにコミュニケーションをとる。水中を進む波動は水を押し上げたり、水圧を生じさせたりする。大気中においては同心円の動きを生じさせる。電子が中心核の周囲に円を描くにつれて、人間には知覚できない音を生じさせる。そして火・空気・水・土は固有の音調を持っている。

主 音

そして自然界の「七つの母音」： $\overset{\text{イ}}{\text{I}}$ 、 $\overset{\text{エ}}{\text{E}}$ 、 $\overset{\text{オ}}{\text{O}}$ 、 $\overset{\text{ウ}}{\text{U}}$ 、 $\overset{\text{ア}}{\text{A}}$ 、 $\overset{\text{ム}}{\text{M}}$ 、 $\overset{\text{ス}}{\text{S}}$ はあらゆる創造物の中で鳴り響いている。すべての花、山、川は固有の音、和音を持ち、地球で生じるあらゆる音の合奏は、無限なる宇宙の広大なコーラスに一つの「和音」を添えている。それぞれの世界が独自の「主音」を持っており、無数に存在する主音が全集合して、星々がきらめく宇宙空間に妙

なるオーケストラを奏でている。これがピタゴラスの言った「天球の音楽」である。

共 鳴

もし音楽家が楽器を弾いて、ある人物の体の主音を鳴らし最大限にのばし続けたならば、その人はすぐに死んでしまうだろう。人体の全細胞は「音」によって、「言葉」によって維持されている。有機体全体の原子は絶えまない動きの中で生きている。そして動きの中に存在するあらゆるものは鳴り響いている。ロゴスが鳴り響いている。人体の原子のあらゆる動きを総合した和音は、共鳴の法則によってたちまち人間を殺すことが可能である。

ヨシュアが角笛を鳴らしたとき、エリコの城壁が崩れ落ちたと言われている。それは、ヨシュアが城壁の主音を鳴らしたからである。軍隊では大勢の兵隊が橋を渡るとき、行軍を崩す。そうしないと行進のリズミカルな音が、渡っている橋の安定性を破壊するおそれがあるからである。一台のピアノの音を鳴らすと、そばにあるもう一台のピアノも同じ音が鳴る。これは共鳴の法則によるものである。

これらの例を、前述したことと合わせて考えてみよう。実際に、音楽家がある人間の主音を鳴らして過度に鳴り響かせれば、共鳴の法則によって人体にも鳴り響くのである。二台のピアノの例と同じである。しかしこのことはその人間の即死を意味する。振動が激し過ぎて、人体の通常のバランス抵抗を超えてしまうからである。

言葉の幾何学

言葉は、その対象となる幾何学模様を生じる。そのような模様はコスミックな質料で満ちていて、物質的に結晶化する。「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。すべてのものはこれによってできた」。録音テープの上に、まさにその言葉の幾何学模様が実在している。ある人の発したすべての言葉を大きく強く鳴り響かせるには、一つのボタンを押すだけで十分である。

マントラ

叡智によって音声の組み合わせされたものが“マントラ”である。マントラは文字の神聖な結合であり、それらの文字の響きは霊的にも、心理的に

も、肉体的にも影響を与える。

“バベルの塔”のためにあらゆる言語が出現したが、それ以前にはただ一つの言語だけが存在していた。それが黄金の言葉であり、宇宙の言葉である。その言葉は完全なる「コスミック文法」を持っている。黄金の言葉の文字は自然界のすべてに書かれている。北欧のルーン文字、ヘブライ文字、中国語、チベット語を研究する者は誰でも、それが不思議な文字で綴られた「コスミック言語」であることを直観するだろう。

性腺と喉の関係

性腺と創造的な喉の間にはきわめて密接な関係がある。少年が14才になると男性の声に変わる。それは性腺が活動し始めたことを意味する。それゆえ性腺と創造的な喉が密接な関係にあることは明白である。

アルカーノA. Z. F. と第三ロゴス

第三ロゴスのエネルギーは性器と創造的な喉を通して表現される。まさに第三ロゴスの強力な創造エネルギーの流れているのがこの二つの器官である。アルカーノA. Z. F. のワークを行うとき、神聖なる蛇が目覚める。第三ロゴスの上昇する創造エネルギーの流れは、生きている“火”である。そのペンテコステの火は脊髄にそって上昇し、各センターを開いて、奇跡的なパワーを目覚めさせていくのである。

クリスト化された言葉は性的である

神聖な火が創造的な喉に達すると、人は言葉のパワーを使って創造することができる。内的世界でのイニシエイトたちは考え、言葉を使ってそれを創造することができる。言葉は創造する。宇宙は「声の軍隊」、「偉大なる言葉」によって創造された。

性の秘儀を実践する者、つまりアルカーノA. Z. F. のワークを行う者は言葉をクリスト化しなければならない。言葉と性は密接な関係がある。言葉は性的である。マグヌム・オプス（偉大なる作業）のワークを行うとき、創造エネルギーを昇華させるときは、言葉をクリスト化しなければならない。それは、汚れた言葉、不調和な言葉、邪悪な言葉はそのヴァイブレーションゆえに創造エネルギーを制限してしまうからである。絶対的と言ってよいほど、創造エネルギーに致命的なヴァイブレーションを与えて

しまうのである。

神聖な言葉、崇高で調和がとれ、リズムカルでメロディー伴った完全な言葉は、栄光ある性エネルギーの昇華を生じさせる。

我々の尊敬すべき世界の救世主は、性の杯を飲み、言葉をクリスト化した。それゆえに言葉はマントラ的である。言葉は性的なのである。

もし我々が黄金の言葉を話すなら、火・空気・水・土は我々に従うであろう。我々は真の神々になるであろう。山に向かって神聖な言葉を発して崩壊するように命じるならば、山は驚くべき大変動を起こして粉々に砕け散るであろう。

言葉の変形

大砲の轟きは窓ガラスを破壊する。反対に、ソフトな言葉は怒りを鎮める。しかし不調和で粗雑な言葉は、怒り、意気消沈、悲嘆、憎悪などを生む。沈黙は金であると言われている。さらに言えば、黙るべきときに話すのは、話すべきときに黙るのと同様に悪である。

沈黙が罪になることもあれば、恥ずべき言葉もある。話された言葉がどのような結果をもたらすのか、高潔な心をもって予測しなければならない。なぜなら多くの場合、無意識のうちに言葉で他人を傷つけてしまうからである。裏の意味を含み、悪意で満たされた言葉は、メンタル界で性エネルギーを消耗させる。怒りの言葉はコスミック・マインドの世界に暴力を生じさせる。言葉を用いて、何人をも非難してはならない。なぜなら決して誰をも裁いてはならないからである。中傷、陰口、うそで世界は痛み、そして苦しみで満ちている。

もし我々がアルカーノA. Z. F. のワークを実践するならば、創造エネルギーがあらゆる変化にさらされるということを理解しなければならない。リビドーのこれらのエネルギーは、光にもあるいは闇の力にも変わり得る。すべては言葉の質によるのである。

魔術的なマントラ

各チャクラを開発するためのマントラが存在する。それらによって神秘的なパワーが目覚める。アストラル体で離脱するためのマントラ、火・空気・水・土を支配するマントラ、地獄の底に棲む闇の存在たちに対抗する防御のマントラなど、数多くのマントラがある。

例えばマントラ「 $\overset{1}{I}-\overset{7}{A}-\overset{*}{O}$ 」は、アルカーノ A. Z. F. のマントラである。I (Ignis:火)、A (Aqua: 水)、O (Origo:起源、魂)。

「I」の火は生命を生じさせるために、「A」である宇宙の原初の水を受胎させる。そしてそのすべては「O」の内部、生命の普遍的な魂の内部で実現される。

内なるマスターは「和音」である

ロゴスの神聖な神秘はアステカ、エジプト、インド、ペルシア、ローマ、ギリシアなどで知られていた。ヘブライのあらゆる楽園は「生命の純粋な水が流れる川」で満たされている。その川からミルク、蜂蜜、聖なるワインが湧き出て、飲む人を夢中にさせる。実際にそれらのすべての川、すべての生命の水、すべての寺院の湖は、人が精囊にもつクリストの精液のシンボルである。

秘教的な性によって法悦状態にあるとき、マスターを出現させるために聖霊の神聖な火が生命の水を受胎させる。まさしく内なるマスターは、あらゆる音を統合した和音である。彼は我々の内に宿っている神である。彼は言葉である。

マントラの発音

今こそ、アストラル体のマグネティックな円盤であるチャクラを目覚めさせるために、黄金の言葉を発し、その解説を学ぶべきである。そうすれば、誰も高次の世界の偉大なる神秘の現実を見、聞き、感じることができる。そのためには行動を起こさなければならない。しかしその行動は物質を超越した意識的なものでなければならない。なぜなら全宇宙が絶え間ない動きの中で生きているからである。すべての動きは本質的に音と同じである。動きが存在するところには、必ず音が存在する。それゆえ、我々は音を支配すべきである。

第3章

テウルヒア

テウルヒアの司祭

テウルヒア（魔術）によって、高次元世界で作業することができる。例えば、偉大なる魔術師であったヤンブリチュスは、惑星の神々を招喚し、会話する術を知っていた。テウルヒアは神聖なものである。そして自分自身を知らずして魔術師になることはできない。あらゆる人間の内なる神は、実際に真正な魔術師である。

人間は明らかに三つの実相を有している。それは内なるクリスト、霊、悪魔である。それらの三つの実相のうち、いずれがテウルヒアの司祭を行うことができるだろうか。

心理的「我」はサタンである

悪魔は「我」、「私自身」である。それはあらゆる人間が内に持つエゴであり、そのおそろしい存在は隠れた敵の原子からできている。

あるとき、アーノルド・クルム・ヘラーという名の、かの偉大なる人物を研究するために、我々はグループで高次元において調査を試みた。クルム・ヘラーは数多くの書物を著わし、つい最近肉体を去ったばかりであった。この調査は我々が肉体の外へ出て活動したときになされたものである。

我々はマスター・クルム・ヘラーを招喚した。そのとき我々の呼び出しに応じてやって来たのは、なんとヘラーの心理的「我」、サタンであった。

魔術師は心理的「我」か、否か

それを分析すると次のようなことが明らかになった。心理的「我」は、地上生活における一連の記憶、欲望、理論、偏見、欠点などに過ぎないということである。そのおそろしい実体は見たところ、偉大な名医のようであった。医服を着て、偽善的な雰囲気をつたよわせ、謙虚さと高慢さを合わせ持った感じだった。彼は我々を観察していた。それはクルム・ヘラーと呼ばれる人物の心理的「我」、サタンであった。疑いの余地なく、その心理的「我」が魔術師になるということは不可能である。その心理的「我」が魔術師になろうとすれば、完全に失敗するのが宿命である。同じ理由で、悪魔は魔術師になることができない。黒魔術師になることはできても、決して魔術師になることはできない。

霊：アートマン・ブッディとボディーサットバ

次に第二の実相である霊を見てみよう。調査のために集まった我々兄弟たちはアストラル体でノーシス教会の扉を通った。そこには、二人の高位の人物が椅子に座っていた。一人はクルム・ヘラーのインティモであった。彼はノーシス大司教として法冠を被り、紫色の服を着ていた。もう一人の方はマスター・ヘラーのボディーサットバであった。

前者は東洋で言われる**ブルシャ**であり、モノイドであり、インティモである。すなわちアートマン・ブッディのことである。後者は東洋の神智学で言う高位マナス、すなわちコーザル体である。もっと分かりやすく言えばアストラル体、メンタル体で包まれた意志霊であり、いわゆるボディーサットバを構成しているものである。

魔術師は内なるクリストである

それらの二人の人物について深く分析すると、次のような結論が得られた。存在の本質のそれら二つの要素は、**“世界霊”**の二つの分身に他ならないということである。つまり二つの神聖な分身ということである。“世界霊”それ自体は、司祭になることはできない。世界霊は司祭に至るまでに、生と死の儀式を学ばなければならないのである。

ゆえに魔術師とは、より内面的で奥深く、深遠なるものである。魔術師は世に現れるすべての人間が持っている内なるクリストである。魔術師は人間の中で光り輝く智慧のドラゴンであり、それはかのインティモを放射する光線である。内なる神がインティモに入るとき、壮大な変換を観ることができ。我々の内においてインティモ、“世界霊”が変換され絶対的に神聖化される。この錬金術的結婚、神聖なる原理と人間的原理の驚くべき融合から、いわゆる「人の子」が生まれる。「人の子」がボディーサットバを貫くとき、奇跡的な変換を通過するのである。そのようにして人間の内に、我々自身の内に、魔術師が生まれる。

魔術師のエゴの崩壊

高等魔術^{テウルヒア}を志願するイニシエイトは、まず最初に「生と死の儀式」を学ばなければならない。そうして司祭になるのである。高等魔術に達したいと欲する者は、死ぬ決意をしなければならない。「我」「私自身」「サタン」を溶解しなければならないのである。その仕事は辛く苛酷で、おそろしいほど困難である。まずエゴの斬首、エゴの崩壊の仕事から始めなければならない。浄化と奥深い理解によってのみ、それは実現されるからである。テウルヒアの最初の段階では、メンタル界、アストラル界、エーテル界、さらに物質界を直接支配することができる。さらに高度な段階になると、それは無限であり、「絶対」まで制することができる。そのプロセスは遅々として、忍耐を要するが、規則正しく進んでいく。

テウルヒア、神々の科学

テウルヒア（魔術）が、専ら神々の科学であるという事実が分かったからといって、何もがっかりする必要はない。常にはじめの段階というものが存在する。前段階の学校に入ることなく大学に進学できるものは一人もいない。それゆえまずアストラル界での実践から始めなければならない。その後さらに高次元の世界で働き、ヤンブリチュスのように星々の神と会話することができるようになるのである。

第4章

天使アロッチ

アロッチの招喚

ある夜、ヨハネは肉体から外に出た。ヨハネは完全にアストラル・トリップに熟達していた。意識を持ってアストラル体で旅することができて、高次元世界を調査するのに十分な能力があった。いったん肉体の外へ出ると、ヨハネは言い表しようのないほど精神的な恍惚感が自分を圧倒するのを感じた。霊の解放ほど大きな喜びはないからである。内的世界では過去も未来も、永遠なる「現在」の中で等しくなる。そこには時間は存在しない。ヨハネは幸福を感じていた。そして自分の神秘的なインスピレーションに従って、ある寺院の中に入ってしまった。

その驚くべき魔術師ヨハネは、天使の指揮者アロッチ(Aroch)を呼ぶために、次のようにインヴォケーション(招喚)を行った。

「クリストの名において、クリストのパワーによって、クリストの威厳によって、ここに来たまえ。天使アロッチ！ 天使アロッチ！ 天使アロッチ！」

ダグドゥーバの恐ろしい存在

その結果はすばらしいものであった。たちまちにして、12才ぐらいの美

しい少年が寺院の扉から入ってきた。天使アロッチであった。

アロッチは力の光線の中で進化してきた天使で、アデプトの細い道を歩く弟子たちと共に精力的に働いていた。

白いチュニックに身を包んだ、気品あふれるその少年は、ヨハネに挨拶をして、彼の隣に腰を降ろした。寺院のテーブルを前にしてヨハネは様々なことを相談した。そのとき彼はアロッチに対して一つだけ愚痴をこぼした。その内容は、黒魔術のスクールの闇の存在たちが、ノーシスの教義について痛烈な批判をしているということであった。その闇の存在たちは一つのスクールを持っていて、そこではダグドゥーバー族のタントラの科学、ボン教の科学、紅帽派のドゥグバ(Dugpa)が教えられていた。それらチベットのおそろしい一族にとって、サナート・クマラ王権の下にある白ロジジ集団が住むシャンバラは、不可視の電氣的な力が躍動する恐怖の砦であった。それゆえ闇の存在たちはシャンバラに対して、数えきれないほどの中傷を行っていたのである。

それらの人々はカーリー女神を崇拜し、ニコライタス(Nicolitas)の科学、黒タントラを実践していた。

ノーシス主義に対する中傷

タオの道は最終的な解放に通じている。それはノスティック・イニシエイトの歩む道である。ダグドゥーバー族のおそろべき存在たちは、「道」の影を、正反対のことを、災いを教える。

その秘密結社の支持者たちはノーシス・ムーブメントに対して批判、中傷を浴びせかけていた。それにヨハネは言い表し難いほどの苦しみを感じていたので、天使アロッチに対して愚痴をこぼしたのだった。ヨハネはまた、ノーシスに対して猛攻を加えている一冊の書物をアロッチに見せた。天使アロッチは天秤を手にとり、善と悪を秤にかけて言った。「私に任せなさい」。

その結果は並外れたものであった。二、三日後、その秘密結社は完全に崩壊した。

クンダリニー覚醒のためのマントラ

前述のようにヨハネが愚痴をこぼし、天使アロッチの約束が果たされた後、ヨハネはアロッチにクンダリニーを目覚めさせるための、全宇宙の中

で最も強力なマントラを教えてくれるように願った。そのときアロッチは驚くべきマントラを吟唱した。それはヨハネを震撼させた。

カンディル バンディル
KANDIL BANDIL
ルルルー
RRRRRRRRRRRRRR

発音：それぞれの聖語の最初の音節「カン」と「バン」を高いイントネーションで柔らかくのばして発音する。そして最後の音節「ディル」を低いイントネーションでのばして発音する。「ルルルー」は「カン」と「バン」よりも微細で高い振動を与える。その発音は、子供が動くモーターの振動音を真似るときのように、または薄い鋼鉄の刃を研ぐときの電動研磨機の音のように高く鋭い音で、流れるようなイントネーションで発音する。

カ ディル
- -
KAAANNNN..... DIIILLLL.....
バ ディル
- -
BAAANNNN..... DIIILLLL
ルルルー
RRRRRRRRRRRRRRRRRRRR.....

(上記において繰り返し用いた続け字は、のばして発音する)

このマントラは毎日好きなだけ、長時間、何度でも繰り返し発音することができる。

天使アロッチがマントラを吟唱した後、魔術師ヨハネも吟唱した。天使アロッチはヨハネに祝福を与え、ヨハネの見せた敵意ある雑誌と共に正義の天秤を手にして、聖域を後にした。

* * *

第5章

ヒーナスの状態

マントラとヒーナス

我々の友人で科学的占星術に一身を捧げているすばらしい人物がいる。ある日、その友人が我々に一人の男に関する出来事を話してくれた。その男は牢獄に閉じ込められていたが、いつでも看守の目を欺いて不思議な方法で消えてしまうというのである。牢獄の中を捜しても無駄であった。鎖で繋いでおくことも無駄であった。なぜなら彼はいつでも鎖から自分を解放し消えることができたからである。

その男は占星術師と友だちになり、ついにはその価値ある秘密の鍵を何のためらいもなく占星術師に教えたのだった。

その方法は次のように行う。

大きなパンの上に、以下ようなマントラを書く。

セノサン ゴロラ ゴベル ドン
SENOSAN GORORA GOBER DON

そしてそのパンを食べる。マントラの言葉はインクなどを用いて十字形にして書かなければならない。その分け方は次のようにする。まず水平に「SENOSAN GORORA」と書く。次に最初の二つの聖語の間を

通って垂直に上から下へ「GOBER DON」と書く。

鍵の調査

ヒーナスの方法を明かしてくれた占星術の科学者に感謝を述べた後、我々自身の手でその方法の科学的・秘教的な価値を知るために、高次元世界で調査を試みることにした。この目的を念頭において、我々調査隊の面々はそのマントラを発音しながら眠りに入っていった。その結果は驚くべきものだった。我々が肉体を捨ててアストラル界に入ったとき、海が見えた。大洋のおそろべき神は、計り知れないほどの深い海を驚くべき方法で揺さぶったのである。するとエーテル状の波が生じ、それが同心円を描き、我々が肉体を捨てた所へ猛烈な勢いで押し寄せてきた。大洋のおそろしい神はエーテルの旋風、エーテルの大暴風を起こし、ものすごい力を発して、我々が肉体を残した所まで突進してきたのである。そのとき我々は何か不可思議なことが起こるのだと判っていたが、その恐怖は次第に死の恐怖へと変わっていった。

しかしながら我々の招喚に応じて到来した存在は、我々の肉体をヒーナスの状態に置いたり、四次元に浸透させたり、世界中のあらゆる場所に移動させることのできる力を持っていた。

「ヒーナス」の楽園、至福の楽園

まさしくその水の神は「生命のエーテル」を支配し、全能なる力を有していた。そこで我々は、占星術師の友人が明かしてくれたやり方は、科学的な方法であるということを理解した。

ヒエラルキーや「ヒーナス」のマスターたちがこのような魔術的操作を行えるのは、もちろん犠牲者が不当に牢獄に入れられているようなときだけである。偉大なる白ロジのマスターは決して法に逆らうようなことはしない。

このようにして、マントラの力によって肉体を「ヒーナス」の状態に置くことを学び、多くの犠牲者が苦痛や、不正を行う人間たちから逃れることができるのである。

太古の時代、原初の人々は「ヒーナス」の楽園に住んでいた。そしてこの三次元の凝縮された世界に堕ちてしまった。しかしながら、肉体を「ヒーナス」の状態に置くことを学ぶならば、「ヒーナス」の楽園を訪れる特

権を手に入れることができるだろう。そこでは純粋な水の川がミルクと蜂蜜を湧き出している。それはマホメットの言う至福の楽園である。

次のように私は聞いた。

「選ばれた者は、『永遠』に導かれるだろう」「彼らは歓喜の園（ヒーナスの土地）の住人となるであろう」。

「大勢の老人。永遠の若さは彼らに仕える」「そして黄金と宝石で飾られたベッドで休みに就くであろう」。

「彼らは愛情をもって見つめ合う。青春の中に永遠に続く若さは、彼らにかしづくためにその回りをめぐる。溢れるワインの入った杯を手にとって……。そのワインは飲んでも、頭痛をもよおしたり理性を失ったりすることはないであろう」。

「食べたいと望む果物、鳥の肉があり、また大きな黒い瞳の美しい『ウアリ』がいるであろう。その瞳は、貝の中に隠れた真珠のよう。これらの素晴らしい待遇は、彼らの行ってきた徳に対する褒美なのである」。

「彼らは、そこでつまらない会話を聞かない。また罪の訴えも聞かない。ただ『安らかに』『安らかに』という挨拶の言葉のみを耳にする」。

「親愛の握手をする同胞たちはどんなに幸せなことだろう。彼らは刺のない木々や上から下まで実がたわわになる木々に囲まれて住むだろう。大きな木陰で、流れるせせらぎの近くに、なくなることなく自由に採ることのできる有り余るほどの果実に囲まれて暮らすだろう。彼らは高貴なベッドで休むだろう」。

「見よ、我々は彼らに一つの創造物をつくった。彼らのために処女たちをつくった。処女たちは彼らを愛し、彼らと同じ若さを享受するだろう」。

（『コーラン』審判の章 56:11～36）

ヒーナスの状態のペテロ

聖書はペテロについて語っている。ペテロは牢獄に閉じ込められたが、肉体をヒーナスの状態に置いて逃れることができたのである。

5. こうして、ペテロは獄に入れられていた。教会では、彼のため

に熱心な祈りが神にささげられた。

6. ヘロデが彼を引き出そうとしていたその夜、ペテロは二重の鎖につながれ、二人の兵卒の間に置かれて眠っていた。番兵たちは戸口で獄を見張っていた。

7. すると、突然、主の使がそばに立ち、光が獄内を照した。そして御使はペテロのわき腹をつついて起こし、「早く起きあがりなさい」と言った。すると鎖が彼の両手から、はずれ落ちた。

8. そして御使が「帯を締め、靴をはきなさい」と言ったので、彼はそのとおりにした。それから「上着を着て、ついてきなさい」と言われたので、

9. ペテロはついて出て行った。彼には御使のしわざが現実のこととは考えられず、ただ幻を見ているように思われた。

10. 彼らは、第一、第二の衛所を通りすぎて、町に抜ける鉄門のところに来ると、それがひとりでに開いたので、そこを出て一つの通路に進んだとたんに、御使は彼を離れ去った。

11. その時ペテロはわれにかえって言った。「今はじめて、ほんとうのことがわかった。主が御使をつかわして、ヘロデの手から、またユダヤ人たちの待ちもうけていたあらゆる災から、私を救い出して下さったのだ」。

(『使徒行伝』 12:5-11)

結 論

ヒーナスの状態に肉体を置くために使われる方法というのはこのようなものである。我々が伝授したマントラを発音しながら眠りに就きなさい。そのとき、我々は天使の援助を受けるであろう。ペテロのように寢床から起き上がり、夢遊病者のように歩を進めなさい。そうすれば我々の肉体は至福の楽園、ヒーナスの楽園に入るであろう。

第6章

ミネルヴァの鳥

ケツアル

ミネルヴァ(Minerva)の鳥は叡智のシンボルである。ケツアルについて語る人は多いが、その神聖な鳥の神秘を理解している人は少ない。ケツアルは世界有数の美しい鳥である。その尾は長く、大変美しい。頭上には緑色のすべすべした、類まれなほどの美しい鶏冠とさかが輝いている。その鳥の様相すべてが我々に多くのことを示唆している。

ミネルヴァの鳥、奇跡のケツアルは、「火」の絶え間ない変換の結果として生じたものである。その鳥の秘密の力によって、我々は神々へと変換することができる。その力によって我々は望むものへと変身できるのである。その鳥の秘密の力には、アストラル体の磁気的な円盤、車輪であるチャクラを開くパワーがある。

ペンテコステの神聖な火が脊髓の中央管にそって上昇するとき、火の鳥へと変換するための奇跡の力が得られる。その鳥はケツアルのシンボルである。それはミネルヴァの鳥である。そして司祭の力の鍵でもある。

「アルカーノA. Z. F.」とクンダリニー

アルカーノA. Z. F. のワークを行っている間、魔術師はその力を使うことができる。男根と女陰の結合の中にあらゆる力の鍵が存在するということは既に述べた。生涯、魔術師たる者は決して精液の本質を放出してはならないということも既に忠告した。そのような欲望の抑制によって、精液は繊細で魔術的な蒸気へと変換されるのである。そしてこの蒸気は同時に、電磁気的なクリスティック・エネルギーに変換される。

第三ロゴスの創造エネルギーは、東洋でイダとピンガラとして知られる神経経路にそって上昇する。それらはアポカリプス（黙示録）の二人の証人である。二つの神経経路は脊髄に巻きついてマーキュリーの杖を形成している。太陽と月の原子が二つの神経経路にそって上昇し、トリベニ近くの尾骨で接触するとき、クンダリニーの神聖な火が目覚めるのである。クンダリニーの上昇は脊髄の中央管で起こる。そして太陽ロゴスのオーラの内で進化する。クンダリニーはハートの徳に従ってゆっくりと上昇していく。ハートの火はクンダリニーの上昇を支配しているのである。そしてクンダリニーの火はミネルヴァの鳥に変容する。

そのために重要なことは、その鍵を知ることである。

性魔術におけるマントラ

もはや、人間を神聖化するための力の鍵を人類に隠すことはできない。我々は大きな喜びをもって奇跡的な力の鍵を弟子たちに伝授することにしよう。性の秘儀の恍惚状態の間、次のマントラを発音しなさい。

ハオリ
JAORI

それぞれの母音のはばして発音する。そしてこの驚くべき火の鳥に必要なと思われるチャクラを開き、発達させるように命ずることもできる。また最も手に入れたいと望んでいる能力を完全に開発してくれるよう命ずることもできる。他の能力も、ミネルヴァの鳥が磁気的な円盤・車輪であるチャクラに働きかけて必ず開いてくれるだろう。なぜならそれは至上命令だからである。

それらの機能はただちに開発されるものでないことは明らかである。しかしミネルヴァの鳥はそれらを目覚めさせるだろう。もし毎日エクササイズを続けるならば、ミネルヴァの鳥、神聖なるケツァルは必要とされるそ

の機能を確実な方法で開発するだろう。重要なことは、^う倦まずたゆまず努力することであり、毎日熱心にエクササイズに励むことである。

チャクラへ向けての火の発射

火の奇跡の鳥は、遠隔地へ向けてクンダリニーの火を投射する鍵を我々に与えてくれる。そのようにして病人を助けることができるのである。また秘教学徒のアストラル体のすべてのチャクラにも、その火を投射することができる。ある学徒は自分の火を前立腺のチャクラに投射するが、それは意識的にアストラル・トリップする能力を得るためである。またある学徒は額のチャクラに火を投射するが、それは超視覚を目覚めさせることを目的にしている。喉のチャクラへの火の投射は、超聴覚を与えてくれる。そのチャクラによって、ヨギは自分の肉体を完全な健康体とし、コスミック・ナイト（宇宙の夜）の時にさえも、肉体をそのままの状態で保つことができる。ある者はミネルヴァの鳥を太陽神経叢に投射する。そのチャクラは、火の中で焼かれることなく何時間もとどまり続ける能力を我々に与えてくれる。奇跡の鳥をハートのチャクラに送ると、そのチャクラはハリケーンや風などを支配する能力を与えてくれる。また千枚の花弁の頭頂のチャクラにミネルヴァの鳥を送ることもできる。そのチャクラによって直観、ポリヴィジョン（多面的超視覚）、直観的視覚が与えられる。そしてさらに特別な乗り物なしで、魂、インティモのみで肉体の外へ出ることができる。

またミネルヴァの鳥を肉体の原子の一つひとつに投射することもできる。そうすれば肉体をヒーナスの状態に置く準備をさせることができる。

誰もが、宇宙のどんなに遠いところへも、有機体のいかなるチャクラにも、「火」を投射することを学ばなければならない。そのようにして内なる力を目覚めさせることができるのである。しかし「火」を燃やすだけでは十分ではない。大作業のために、知性を持って「火」を扱うことを学ぶ必要がある。

回復、変換、不可視のもの

アグニは火の神である。この偉大なるマスターは、七つの体（肉体、エーテル体、アストラル体、メンタル体、コーザル体、ブッディ体、アトミック体）の一つひとつに存在する「火」を回復するために援助を与えてく

れる。

魔術師はアストラル界にいるとき、アグニを呼ぶことができる。アグニはその招喚に応じて現れるだろう。

魔術師はアグニを呼ぶとき、次のように言う。

「クリストの名によって。クリストの威厳によって。クリストのパワーによって」。

もし「火の鳥」に対して、友人たちの目の前で自分の顔を変化させてくれるようにとか、鳥や木の姿に変えてくれるようにと命じれば、「火の鳥」はそれに応じて変身させてくれる。そのとき、彼を識別できる者は一人もいないであろう。

さらに、我々に害を及ぼそうとして見張っている人物のマインドに「火の鳥」を遣わして、その人のマインドに我々を見ないよう命じれば、たちどころに彼から見えなくなる。しかし、この場合、我々を不可視にするパワーを持つマントラを発音しなければならない。それは次のようなものである。

IOD HE VAU HE AMOA HE VAU HE GTA

我々にノーシスを授けてくれた最高秘儀司祭イエスは、不可視になるために何度もこのマントラを利用する必要があった。

「火」の力によって、さまざまな奇跡を起こすことができる。

「火」の力によって、根本的に我々自身を変えることができる。

「火」の力によって、我々は神々になることができる。

* * *

第7章

チャクラ

母音とチャクラの機能

自然界の七つの母音 I、E、O、U、A、M、S は太古において、人間の有機体内で鳴り響いていた。しかし人間が「ヒーナス」の土地から出たとき、そのリズムとハーモニーを失ってしまった。

自然界の七母音を、再び有機体内で振動させ、アストラル体チャクラの神経叢の一つひとつに、また内なる共鳴箱に強く鳴り響かせなければならない。それが緊急に必要なことを人間はまず理解すべきである。

超視覚は母音「I」で開発される。

超聴覚は母音「E」で目覚める。

心臓のセンターは母音「O」で開発され、インスピレーションが与えられる。

前世を思い出させる肺のチャクラは、母音「A」で目覚める。

そして母音「M」、「S」は内部センター全体を振動させる。

これらの母音は決まった子音と結びつけられ、すべてのチャクラを目覚めさせるためのマントラを完璧に組み立てる。

次に、これらの一連のマントラを教えよう。

一番目のマントラ

チー ス	CHIS	超視覚	額チャクラ
チェー ス	CHES	超聴覚	咽喉チャクラ
チョー ス	CHOS	直観	心臓チャクラ
チュー ス	CHUS	テレパシー	太陽神経叢
チャー ス	CHAS	過去生の記憶	肺チャクラ

発音：まず各文字をのばすように発音する。「CH」の組合せはヘブライ語のマントラの中に数多く見られ、それは巨大な魔力を有している。

各マントラの発音は磁気センターであるチャクラを振動させる。「S」の音は「火」と密接な関係があり、その音は特別な音調で発音する。歯の間から擦れてもれるシュー、シュー、という音である。それはまた機械などで空気が圧縮されて生じるエア・ブレイクの音に似ている。

二番目のマントラ

イー ン	IN	超視覚	額チャクラ
エー ン	EN	超聴覚	咽喉チャクラ
オー ン	ON	直観	心臓チャクラ
ウー ン	UN	テレパシー	太陽神経叢
アー ン	AN	過去生の記憶	肺チャクラ

発音：各母音の音をのばすように発音する。「N」は大きな、鳴り響くベルのような音調である。

三番目のマントラ

イン リー	INRI	超視覚	額チャクラ
エン レー	ENRE	超聴覚	咽喉チャクラ
オン ロー	ONRO	直観	心臓チャクラ
ウン ルー	UNRU	テレパシー	太陽神経叢
アン ラー	ANRA	過去生の記憶	肺チャクラ

発音：これらのマントラは各チャクラを目覚めさせるために、性の秘儀のプラクティスをしている間に発音する。マントラを構成している各文字の

音をのばし、「R」の文字は第四章で説明したのと同じように発音する。

四番目のマントラ

スイー ラー	SUIRA	超視覚	額チャクラ
スエー ラー	SUERA	超聴覚	咽喉チャクラ
スオー ラー	SUORA	直観	心臓チャクラ
スウー ラー	SUURA	テレパシー	太陽神経叢
スアー ラー	SUARA	過去生の記憶	肺チャクラ

発音：各マントラの母音と最後の「A」の音にアクセントを付ける。

ヴェーダにも記されているが、崇高な「SUARA」の中には静かなるガンダルヴァ、天の音楽が含まれている。第四番目のこれら一連のマントラによって、太陽神経叢の火がアストラル体の各チャクラへと導かれる。

繰り返して述べておこう。これら一連のマントラの第一音節、SUI、SUE、SUO、SUU、SUAは母音が二つ連続しているが、後の二番目の母音の方にアクセントを置く。そしてそれを長くのばすのである。

これらの各マントラの「RA」の音節に関しては、「R」に第四章で説明した音調を付ける。そしてRAの音節の母音「A」を長くのばす。

詳細な説明

チャクラを効果的に目覚めさせるために、毎日一時間発音するとよいだろう。一人ひとり固有のリズム、個人的なヴァイブレーションがある。それゆえに、どの一連のマントラを選択してもよい。第一番目のマントラを最も信頼する者もいれば、二番目のマントラを信頼する者、その他のマントラに信頼を置く者もいるだろう。ドクター・クルム・ヘラーは、毎日一時間発音するだけで十分であると言っている。チャクラを活発に活動させるために生涯を通してマントラを発音しなければならない。

王冠のチャクラはポリヴィジョン（多面的超視覚）を生み出す。

眉間の額チャクラは超視覚。

喉のチャクラは超聴覚。

心臓チャクラはインスピレーションと直観。

太陽神経叢のチャクラはテレパシー。

肺のチャクラは過去生の記憶を思い出させる。

前立腺のチャクラは、意識を持ってアストラル・トリップするパワーを与えてくれる。そのような能力を持っていなければ、それを所有しなければならない。そのためにこのチャクラを目覚めさせる必要がある。

前立腺のチャクラのためのエクササイズ

前立腺チャクラについて深い瞑想に入りなさい。そのチャクラを蓮華のように、または左から右へ回転する磁気的な円盤のように想像するのである。同時に「M」を発音する。牛のモーという鳴声の始まりのように、しかし持続させて長く音調が下がることなく発音する。深く息を吸って唇を閉じ、息の最後の一息を吐き切るまでその「M」の音を続ける。次のように。

ムー
MMMMMMMMMM.....

これらの一連のマントラによって、学徒は実践的な魔術師になることができるだろう。

* * *

第8章

アストラル トリップ

魔術師のプロジェクション

魔術師は意識を持ったままアストラル・プロジェクションを実践し、それを絶対確実に行えるだけの能力を得なくてはならない。習慣のようにいつでもどこでも意のままに行えるように、この能力を確立しなければならない。一人で行う場合、誰かの前で行う場合、いずれの場合でも、実行できなければならない。そうでなければ魔術師とは言えない。

ここで、この称賛すべき貴重な能力を手に入れるためのいくつかの鍵を紹介することにしよう。

第一の鍵

眠りに就きながらマントラ「^{ファ} ^ラ ^{オン} F A - R A - O N」を三つの音節に分けて次のように発音する。

^{ファ} F F F F ^ラ A A A A A ^{オン} R R R R R A A A A A O O O O O N N N N N
ルル

文字「R」の発音は既に説明したとおりである。まず水平に仰向けに横になる。手のひらはゆったりと広げて布団の上に置く。膝を立てて足の裏

を寢床の上で支える。全身を少しずつ隅々までリラックスさせていく。

そのようにして眠りに就き、呼吸しながらマントラ「FARAON」を発音する。いったん眠りに就けば、いつどのように離脱したのかはわからないが、必ずや体外に離脱しているだろう。

アストラル体が我々の意志に関わらず投影される内的世界、四次元において、ひとたび意識全体が目覚めたならば、その世界において、今まで聞いたこともないような経験をするだろう。そしてテウルヒア（魔術）の実践に身を捧げることができるのである。

しかし寢床に就く前に、マイクロコスモスの星の印を作っておくとよいだろう。これは両腕を上げていき、手のひらが頭上で触れ合うようにする。そこから両腕を横に水平にのばし、体全体で十字架を形づくるようにする。そして最後に両腕を胸の上で交差させるが、手のひらは胸に触れるようにする。そうすると指先は肩の前につく。

我々の尊敬すべき世界の救世主であるイエス・キリストは、カフラー王のピラミッドで修行をしていたとき、今まで明かされることのなかったこの神秘の鍵を使った。

そこでマスター・ウィラコッチャはこのエクササイズ実践のために、何らかの香を燃やすか、または単に室内に芳しい香水を染み込ませるように勧めている。

第二の鍵

別の方法もある。眠りに就きながら、次のようにマントラを発音する。「TAI-RE-RE-RE」。このマントラはTĀĀĀĪĪĪ……と、いうように母音「Ā」に強いアクセントを付けて発音する。残り三つの音節に関しては、「Ē」にベルのような調子の美しいのびした音を付ける。このマントラでは「R」に振動を与えない。単に「レー」と次のように発音するだけである。

レ-
RĒĒĒĒĒĒ……レ-
RĒĒĒĒĒĒ……レ-
RĒĒĒĒĒĒ……

「TAI」の音節は低いトーンで発音し、「RE」の繰り返しは「TAI」よりも高いトーンで行う。

すでに寝入り、覚醒と睡眠のはざまの状態になったときが最も貴重な瞬

間である。その状態のときに寢床から起き上がらなくてはならない。ためらうことなく、怠惰に寝入ることなく、疑うことなく、あれこれ考えることなく、ごく自然に、反射的に、本能的に、自動的に、子供のように全くあどけなく起き上がるのである。鳥を観察してみるとよい。飛び立とうとするとき、飛ぶ行為に関して何も考えることなく、疑いの念を持つことなく、先入観もなく、ただ本能的に、自動的に飛び立つ。このように我々も鳥を見習って、ただ単に寢床から起き上がり部屋を出るだけでよい。そうすれば行きたいところ、無限の空間のどんな離れた地にでも行くことができるのである。「寢床から起き上がらなければならない」と我々は言っているが、これは頭の中で「起き上がる」と考えるのではなく、実際に、直に起き上がることを意味している。

予期せずリラックスした状態で起きた離脱

ある紳士の例を上げよう。その紳士は眠っていたのだが、そのとき誰かがノックする音を聞いたのでドアを開けるために起き上がった。そして自室に戻ってみると、寢床に人がいたので非常に驚いた。よく観察してみると、なんとその人物は寢床に眠ったままの自分の肉体だったのである。

この貴重な話から次のことが理解できるだろう。紳士は眠りに入ろうとする貴重な瞬間に寢床から起き上がったため、必然的に離脱したということである。この話の紳士が離脱した理由は、彼が実に自然に、心の中であれこれ考えることなく、恐れを抱くこともなく、何の先入観も持たなかったということである。紳士はドアを開けに起き上がった。それがすべてであった。

第三の鍵

人間の脳細胞の内側に絶えず鳴り響いている音がある。それは「かすかな音」であり、ス——という歯擦音の鋭い響きである。またそれは「コロギの鳴き声」であり、「蛇の声」「アナハタの響き」であり、「ブラフマの声」である。10の主調があるが、それは魔術師が聴くことを学ばなければならない音である。学徒は蜂が花の蜜を吸っているときのようなその音にマインドを同調させなければならない。

その「アナハタの音」に耳を傾けたければ、学徒はマインドを空っぽにしなければならない。沈黙させるのではなく、静寂なマインドを保つので

ある。繰り返し言うが、沈黙させるのではなく、静寂なマインドである。その神秘の響きを聞こうと試み、そしてその決心をする者は、必ずやマインドを沈黙させるのではなく、静寂の中に保たなければならない。もう一度言うが、マインドを黙らせるのではなく、静寂の中に保つのである。

静まっているマインドと、人為的に黙らせたマインドを区別しなければならない。静めようとするのは無益なことである。自然に静まったままのマインドと、強制的に力ずくで黙らせたマインドを区別する必要がある。

マインドが静まり、深い静寂の状態にあるときは、ごく自然にコオロギの鳴き声、かすかでかん高い響きが聞こえてくる。さらに霊がこの神秘の響きに浸透しているならば、その学徒に対して神秘の扉が開かれる。この瞬間に本能的に寢床から起き上がり部屋を出て、白ロジの寺院や宇宙のいかなる場所へも向かうことができるのである。

学徒は^ラオルフェウスのリラ（七弦琴）をつまびく術を学ばなければならない。リラとは響きであり、偉大なる言葉である。

第四の鍵

学徒は「S」の文字を、甘く美しく「^スSSSSSS……」と発音しながら眠りに就いてもよい。

この「S」を発音することによって、脳内に「かすかな声」、「アナハタの響き」を思うままに鳴り響かせることができる。そのようにすればアストラル体で意識的に体外に離脱することができる。

第五の鍵

性エネルギーの力は陰と陽の二極に分かれている。脊髄に巻き付いている右の神経経路にそって、精液を作る組織から太陽原子が上昇する。そして脊髄に巻き付いている左の神経経路にそって、精液を作る組織から月原子が上昇する。

太陽原子はマントラ「RA」によって鳴り響く。

月の原子はマントラ「LA」によって激しく振動している。

「かすかな声」、「アナハタの響き」を大脳内に鳴り響かせるためには、東洋においてイダとピンガラという名で知られている“二人の証人”の性の力を使用する。

「アナハタの響き」は、活動中の性エネルギーによって生み出される。

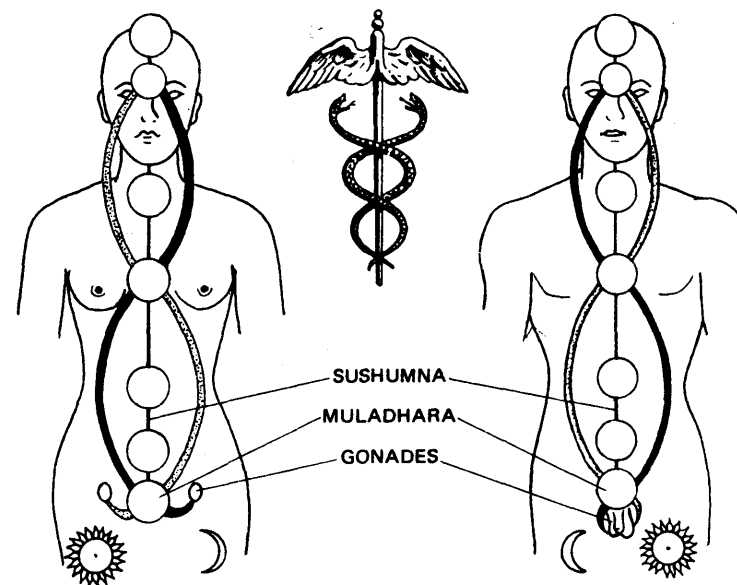
あらゆる動きが響きを生じるということは既に学習したが、例えば精液を作る組織の“太陽と月の原子”に振動を起こさせたならば、「アナハタの響き」はより大きく、激しいものとなるだろう。そして意識を持ってアストラル体で肉体の外へ出ることが可能となるだろう。

次のようにメンタリーにマントラを発音しながら眠りに就く。

ラー LAAAAAAAAA……… ルルラー RAAAAAAAAA………
LAAAAAAAAA……… RAAAAAAAAA………

（RAは巻き舌を使う。LAは普通のラ）

このマントラによって、前述した太陽と月の原子が電氣的な旋風のように強く回転するだろう。そのような動きによって「アナハタの響き」が生じるのである。そしてそれを用いて意識的に肉体の外へ出ることができる。重要なことは、寝入りばなにその神秘的な響きを利用して寢床から起き上がるということである。



聖ヨハネの「アポカリプス（黙示録）の二人の証人」は、意識を目覚めさせた者に預言の力を授与する。右の神経経路にそって「太陽の火」が上昇し、左の神経経路から「月の水」が上昇する。

「火」＋「水」＝「意識」である。「プレゲトンの火」と「アケロンの水」は第九球体（性）の中で交差し、無限のシグナルを形成する。このシグナルとは「聖なる8」である。注意深く「マーキュリーの杖」を観察すれば、「聖なる8」を形成して巻き付いている二匹の蛇を見つけるだろう。

第六の鍵

メキシコには驚くべきサボテンがある。それはマスター・ウィラコッチャの著書『小説薔薇十字』で述べられているが、そのサボテンとはペヨーテまたはヒクリのことである。そのサボテンを噛むと、瞬時にして超視覚が目覚めるのである。またペヨーテは意識的にアストラル体で旅する能力も与えてくれる。ペヨーテは偉大なる白ロジの神聖な植物である。

残念なことに、メキシコ共和国の首都で本物のペヨーテを目にすることはほとんど不可能である。シエラ山脈のタラウアマラス・インディアンの住むサンルイスボトシカ、チワワだったら見つけれられるだろう。

チャプルテペック寺院のマスターたちは、瞬時に、緊急にアストラル界に旅立つためにそのサボテンを服用する。

それを噛むだけで十分である。それがすべてである。

第七の鍵

守護天使：すべての弟子は一人のグル、一人の守護天使によって援助を受けている。アストラル・トリップのプラクティスを試みる前に、マスターや守護天使を招喚して援助を願いなさい。そしてまず、神聖な言葉で内なる神にグルを呼ぶことを懇願しなさい。必ず、このマスターはあなたがたのアストラル体を意識を持った状態で離脱させてくれるだろう。

学徒の中には、悪癖によって、前世において持っていた能力をすべて失ってしまった者が少なからずいる。現在、彼らはすべてのノーシスの鍵を知っているにもかかわらず、意識的にアストラル体で旅することができずに、言い表し難いほどの苦しみを味わっている。

アマゾンとプツマヨの密林地帯にはヤヘと呼ばれる驚異の植物がある。ピアチス(Piachis)族はその植物を煎じて、グアルーモと混ぜて飲む。そ

してアストラル界へと旅立つのである。もし意識を持ってアストラル・トリップを行うことのできないノーシス学徒がこの煎じた植物を飲んだなら、たちまち意識を持った離脱ができるようになるだろう。もし毎日服用するなら、しばらくの間アストラル・トリップの能力が得られるであろう。その後たとえその植物を飲まなくても、アストラル・トリップには不要となる。その頃にはその能力が永久に身に付いているからである。

特別な鍵“識別”

睡眠中、あらゆる人間がアストラル体のまま肉体の外に出て浮かんでいる。不幸にも、人間は睡眠中に意識まで完全に眠らせて、内的世界をさまよっている。そして通常、人々は日中と同じ仕事に専念している。もし意識が目覚めているならば、そのような夜中の仕事に身を捧げている間、高次元世界の驚くべきことすべてをアストラル体の目で眺める機会を持てるだろう。また「生と死の偉大なる神秘」の研究に打ち込むこともできるだろう。

普通に眠っている間に、高次元世界でアストラル体の意識を目覚めさせるための鍵を教えよう。

エクササイズ：起きている間、日中のあわただしい中、いかなる時でも、“識別”を習慣づける必要がある。例えば真紅色の美しい日没を見るとき、次のように論理的な質問を自分に発するのである。「私はアストラル体にいるのだろうか？ 肉体の外に出ているのだろうか？」と。そして空中に浮かぶつもりで軽くジャンプしてみる。浮かんだら、それはアストラル界にいるということである。それは、寝床に眠っている肉体を置いてきたということである。肉体は動かないが、すべての生命機能は働いている。

睡眠中、アストラル体は、物質界にいるのと全く同じように事物を見ている。そのために、誰もが自分は物質界にいるものだとして強く信じている。このことをノーシスを学ぶ者は覚えておかなければならない。物質界では重力の法則が支配するが、内的世界においては空中浮揚の法則が存在する。それゆえ軽くジャンプすることによって、問題は解決される。もしアストラル界において空中に浮かぶならば、意識は目覚めているということである。学徒にとって、あらゆる些細なこと、興味に値するあらゆる物事、自然のあらゆる美観、それらすべては、自分がアストラル界にいるかどうか

を問い掛けたり、軽くジャンプしてみるための動機づけとならなければならない。

日常生活における例証

本書で何度も触れた我々の友人ヨハネは、日常生活のあらゆる場面で、心を魅かれる興味あるものを見つけるたびに、習慣的にこのエクササイズを実行していた。

ある夜、ヨハネは友人たちを訪門した。友人たちは心からヨハネを歓迎してくれた。ヨハネは友人たちの間に座り、その会話に参加し非常に満足したひとときを過ごしていた。しかしながら、ヨハネは重要な物事を目にする度に、例の質問をすることが習慣になっていたので、論理的にもこの友人たちとの会合は自分に問い掛けるための十分なきっかけとなった。

「私はアストラル体にいるのだろうか?」「肉体の外に出ているのだろうか?」ヨハネは周囲を見回した。何を見ても自分が肉体をまとっているようであった。ヨハネの友人たちは、セーターを着ている者もいれば、都会の人が着る普通のスーツを身に着けている者もいた。そこにはヨハネがアストラル体にいることを示すものは何もなかった。しかしながらヨハネはつぶやいた。「ジャンプしてみよう」。そして友人たちに断って、屋外に出た。いったん外に出ると、ヨハネは断固、空へ飛ぼうとしてできる限り高くジャンプした。その結果は驚くべきものであった。ヨハネは空中に浮かんだ。ヨハネは自分がアストラル界にいて、肉体は寝床で眠っていることをはっきりと自覚したのである。

すぐその場でヨハネが自分に対して例の質問をしたというのは、日常生活において常に自分自身にその質問を明確に行っていたからである。その結果このプラクティスは、ヨハネの潜在意識に絶対的な形で刻み込まれていたのである。そして夢うつつの中、まさに肉体の外にいるとき、潜在意識があるがままに自動的に質問を繰り返すように促したのであった。このようにしてアストラル界で意識を持ったのである。

ヨハネは友人たちの待つ部屋に戻り、彼らに向かって言った。

「みなさん聞いて下さい。今、ここに集まっている我々はアストラル体にいるのです。みなさんは何時間か前にベッドに入り、眠りに就いたはずです。ですから肉体は各人のベッドにあるはずです。ここではみなさんはアストラル界にいます」。

ヨハネの友人たちは互いに顔を見合わせ、体に触れ合ったりした。

「そんなことは有り得ない!」「私たちは生身の肉体でいるではないか!」そう言って、彼らはヨハネをまるで狂人を見るかのように笑っただけだった。ヨハネは彼らが無知であり、意識を眠らせて生きていることを理解した。そして彼はその場を離れて——アストラル体で空中を飛んで——カリフォルニア州のサンフランシスコへ向かおうとした。そのとき、ヨハネはあるイニシエイトが建てた寺院を訪れなくてはならない必要性を感じた。

無意識の死者

ある日、ヨハネはアストラル体で道路を歩いている一人の男に出会った。男は荷物を積む運搬人で、背中に非常に重たい大きな荷物を担いでいた。

男を見たとき、詳細が分かった。男は死者で、しばらく前に肉体を去ったところだった。そして今もアストラル体で道路をさまよい歩いていたのである。彼は肉体をまとっていると堅く信じ、自分が死んだとは判らなかった。意識を眠らせて歩き、たくましい背中の荷物もまさに彼自身が心でイメージして作ったものであった。哀れな男は生前、荷物を積む運搬人であった。そして死後も荷物を運ぶ仕事を続けていたのである。

ヨハネは男の意識を目覚めさせてやろうと、声を掛けた。

「もしもし、あなたの今いる状況をご覧下さい。あなたはとうの昔に死んでいるんですよ。もう肉体をまとっていないんですよ」。

男はヨハネを夢遊病者のような目つきで見た。そしてヨハネが理解させようと試みたにもかかわらず、男は彼の言うことが判らなかった。ヨハネは彼の周囲を飛びまわり、もう一度試みたがすべては無駄であった。男は意識を眠らせたまま、ヨハネのあらゆる試みは徒労に終わった。

もし、生前、男が“識別”のプラクティスを行っていたならば、通常の睡眠中に意識を目覚めさせることができたろうし、死んだ今も肉体を去ったとしても、偉大なる白ロジの意識ある弟子に転向することができただろう。

ヨハネはそれ以上の試みを断念して、飛行を続けた。そして遂に目的の寺院に着いた。

その後、満足して自分の肉体へ戻った。デカルトの言う霊の座、ブラフマの窓である松果腺を通して肉体へ入った。

ここで明かされた鍵を使って、内的世界で何とか意識を目覚めさせるこ

とができた弟子たちは数えきれないほどいる。そのことを確信してもらいたい。重要なことは、起きている間、絶え間なくこのプラクティスを実行することである。そうすれば潜在意識にそれが刻み込まれ、睡眠中も自動的にそれを実行できるようになるということである。

これは潜在意識を意識を持った意志として、自由に使用するための一つの方法である。

睡眠の後、肉体に戻って普通の覚醒状態に戻ったとき、寝床で動いてはいけない。というのは、肉体が動くことによってアストラル体が動揺し記憶が失われてしまうからである。そのようなときは回想のエクササイズを実行すべきである。そうすれば自分がどこにいたか、どの場所を旅していたか、アストラル界で何を学んだかを思い出すことができる。

* * *

第9章

特別の エクササイズ

回想のエクササイズ（超視覚）

超視覚を開発するための、世界で最も効果的なエクササイズは、神秘学では“回想のエクササイズ”と呼ばれている。

まず深い内的瞑想に没入する。そして次のようにエクササイズを始める。自分の生活において、その日のうちに起こった最も間近な出来事を細部にわたって思い出そうとする。そしてすぐに、その次に間近な出来事を思い出そうとする。続いてその前の出来事、さらにその前の出来事……というように続けていく。それから昨日の記憶を思い出すのである。そして次に一昨日の記憶を思い出す。このように順を追って思い出していく。回想するための知覚、注意力を自分の生活のあらゆる場面に適用しなければならない。そしてここ半月の間に起こった出来事、先月、先々月に起こった出来事、また昨年、一昨年に起こった出来事…… というように常に回想する形式で思い出していく。一冊の本を最後のページから1ページ目まで、どのページもとばすことなく逆に読み返すように行うのである。

幼年期の最初の七年間を思い出そうとするときには、この回想のエクササイズはさらに難しくなる。しかしながらこの幼年期間に起こったすべて

の出来事、心に思い描いたすべてのことはみな、「潜在意識の倉」にしまわれているということを認める必要がある。重要なことは、「潜在意識の倉」からそれらの記憶を意識の光の下に引き出すことである。

まさに今から眠りに入ろうとするとき、これは可能となる。あらゆる人間は睡眠中に潜在意識と接触をする。それゆえ寝入りばなに、この“回想のエクササイズ”と睡眠を結びつけるのである。思い出そうと必死に努力すれば、7才までに起きたあらゆる出来事を回想することができるだろう。一年ずつ遡っていき、7才から1才までを再調査することができる。そして生まれた瞬間までも回想できるだろう。毎晩、根気よく数えきれないほどの“回想のエクササイズ”を行い、ねばり強い努力を経た後にはじめて、少しづつすべての記憶が浮かび上がって来るのである。あなたはそうようにして心の底から確信していこう。

生まれ変わり特別なマントラ

この回想のエクササイズに次のマントラを併用することができる。

^{ルルラー}
RRRRRAAAA...^{オー}OOOO^ムOMMMMM

このマントラはメンタリーに発音する。今生を誕生の瞬間まで再調査したとき、前世の最後の瞬間に跳躍する準備ができる。これは当然のことながらかなりの努力が必要であり、より多くのエネルギーも費やされる。そうして次に、眠りをこの回想のエクササイズとマントラに結びつけるのである。前世の最後の瞬間、その前の瞬間、老年期、円熟期、成年期、少年時代、幼年期とこれらの記憶を再び生きるのである。これらを回想できると信じなさい。これらのエクササイズの間、アストラルの世界が次々に開かれていく。

自分の過去生を再体験できた学徒は、超視覚者として受け容れられ、その瞬間からすぐに「自然界の記憶」、「地球と人類」の完全な歴史を学ぶのにふさわしい存在となる。

“回想のエクササイズ”は額チャクラを回転させる。

超聴覚と特別なマントラ

超聴覚とは「魔法の耳」である。それは次のマントラで開発される。

^{ヘウセ}
JËUSE

発音: J J J EEEEE...^{ウー}UUUU...^{スー}SSSS^{エー}SEEEEE

^{ヴァウセ}
VAUSE

発音: V V V AAAAA...^{ウー}UUUU...^{スー}SSSS^{エー}SEEEEE

(上記において繰り返して用いたつづけ字の音は、のばして発音する)。

深い瞑想に没入し、眠るつもりで発音するのである。寝入りばなに、遠くにいる友の声に耳を傾けようと努力する。そのようにすれば「内なる耳」が目覚めだろう。

他にも超聴覚獲得の助けとなるマントラがある。

^{アウム} ^{チヴァ} ^{トゥン} ^エ
AUM CHIVA TUN E

「AUM」は口を十分に開けて「A」を、口を丸くして「U」、閉じて「M」を発音する。そしてそれぞれの母音はのばして響かせる。

マントラ「CHI」は、「I」を少し長くのばして発音する。

マントラ「VA」は母音「A」をのばす。

マントラ「TUN」は力強く「T」を「U」に叩きつけるようにする。そして「U」を十分にのばす。「N」には鐘が鳴り響くような音をつける。

最後の「E」はその音だけで、「EEEE...」とのばす。

「AUM」においては、「A」でトーンを上げ、「UM」でトーンを下げる。マントラの残りの部分では「UM」よりも低いトーンで発音する。

心臓チャクラ開発のための特別なエクササイズ

このエクササイズでは最も深い瞑想と祈りを行う。我々は「われらの父への祈り」を勧めている。

「われらの父」に対する心からの祈りは、一時間の瞑想に匹敵する。それゆえ、一時間祈るべきである。

祈りとは、神との対話である。深い眠り、深い瞑想に入り、心の中で神と語ろうではないか。「われらの父」への言葉の一つひとつは、「彼」に

語りかけるための完全なるフォーミュラである。眠りに就いて、言葉の一つひとつの真意を瞑想すれば、神秘にまします「父」を拝し、その声を聞くことができるだろう。

このようにしてハートのチャクラは目覚めるのである。

太陽神経叢のための特別なエクササイズ

この神経叢はテレパシー・センターであることを思い出そう。

座り心地のよい椅子に腰掛け、東の方向を向く。そして遠くに美しい金色の光を放射する巨大な十字を想像する。そこから金色と青色の光線が放射され、それがへその部分に位置する太陽神経叢に到達するのを想像する。神経叢がそれらの光線を浴び、その振動が感じられるように努力する。同時に母音「^ウ」を発音する。それはやや低い調子でのばして発音する。

UUUUU……

このエクササイズを毎日半時間続けること。そうすればテレパシーが開発されるだろう。太陽神経叢のチャクラが目覚めると、額のチャクラが光輝と火で満たされる。そして超視覚者には、その人のオーラがきらきらと輝く色彩であふれ、「想念形態」のすべてが鮮やかに高次元に浮かんでいるのが知覚できるだろう。

内的世界での特別なエクササイズ

このエクササイズによって、物質界、アストラル界、メンタル界などのあらゆる次元の内的世界の存在を知覚することができる。

緊急に、超視覚で何かを知覚する必要に迫られたとき、深い内的瞑想に入り、次のマントラを発音する。

プロウエオア
PROWEOA

それぞれの母音をのばして発音する。

深く集中することを学ぶ必要がある。深い集中、完全な瞑想、心からの祈り。これらはイニシエーションの三つのステップである。

集中、瞑想、祈り、そしてマントラは、我々を真の魔術師に変える。

集中、瞑想、崇高な祈りは、我々にサマーディをもたらす。

集中する方法を知らなければならない。

瞑想する方法を知らなければならない。

マントラを発音する方法を知らなければならない。

そして祈りの方法を知らなければならない。

* * *

第10章

光と闇

秘教的な対立

互いに戦っている二つのロッジがある。それは白ロッジと黒ロッジ、光と闇である。

最も透明な眩いばかりの光が輝くところには、同時に濃い闇も生じる。すべての光の天使のダブルは、闇の天使である。このように、すべての光の寺院のダブルは、同様に闇の寺院である。（この双子霊の神秘については、『神聖魔術秘教コース』を参照）

偉大なるイニシエイト、ゴータマ・ブッダにはダイバダッタという名の同胞かつ敵対者がいたと言われている。仏教徒の言うところによると、ダイバダッタは地獄の王である。

あらゆる人間は自分の中に、人の形をした「ヒューマン・ダブル」を持っている。それは顔つき、態度、身振り、能力などがすべてにおいて等しい。これはエーテル複体、アストラル複体について言っているのではなく、別の異なったタイプの「パーソナリティ」、すなわち双子霊、対立者について述べているのである。そのような「ダブル」の霊は、その人と肉体的には同じ容貌をしているが、まさに正反対である。

同様に白ロッジの対立者、つまり黒ロッジが存在する。このロッジの黒魔術師たちは、人々を道から逸れさせるのを目的として戦っている。そのためにこれら闇の住人の攻撃に対して防御することが、つまりその防御法を学ぶことが、何より優先して必要なのである。

闇の住人たちからの様々な攻撃パターン

闇の住人はその悪意を行使するために、数え切れないほど様々な手段を用いて人間を攻撃する。

1. 睡眠中に攻撃する。
2. 起きている間に攻撃する。
3. 黒魔術を使って攻撃する。
4. 心理に取り憑く（強迫観念、妄想）。
5. 憎しみや敵意を抱かせる。
6. 肉体を病気にさせる。
7. 悪癖、墮落行為を通して攻撃する。
8. 文化の様々な局面を通して攻撃する。
9. 偽りの予言者を通して攻撃する。
10. “エレメンタリー”を用いて攻撃する。

黒い魔女たちによる夢の中での誘惑

道を歩む者は、熟睡中に闇の住人から攻撃を受けるのが常である。内的世界には、黒魔術の寺院が存在する。そして闇の存在たちは非常に美しい魅惑的な黒の魔女たちを我々に送ってくる。その唯一の目的は、我々を性的に墮落させることである。精液をこぼすときに、クンダリニーが下降することを彼らは知っている。弱くて、油断している学徒は、パワーを失うだろう。

マントラの歌

それゆえ、そのような夜の攻撃から身を守る術を学ぶ必要がある。天使アロッチは闇の住人から自分の身を守るために、マントラの歌を明かしてくれた。その歌は眠る前に歌うとよい。

ベリリン (Belilin) …… ベリリン …… ベリリン ……

救いのアンフォラ

あなたのそばにいたい

唯物主義は私には何の力もない

ベリリン …… ベリリン …… ベリリン ……

（アンフォラ：二つの取っ手のついた壺）

このマントラは自分のすべての愛と感情を込めて歌うべきである。このようにして闇の存在から自分を守ることができる。

生命の夜明けの際、神々の父は宇宙の建築家たちに宇宙の法を授けたが、それは楽しく歌いながら行われたことを忘れてはならない。

これらのマントラを全身全霊を込めて歌わなければならない。真心を込めて歌うのである。そうすれば闇の存在に対して防御することができる。

性の秘儀を習慣のように毎日行なうならば、闇の存在が蓄えられた価値ある精液を放出させることは不可能となる。さらにそれどころか夢精も起こらなくなる。

起きているときの誘惑

黒魔術師は隣人を性的に攻撃するために、悪意をもって多くの異性を遣わすのが常である。

それが「誘惑」である。似たような緊急の場合にも、これらの邪悪な誘惑に対して前述のマントラが有効な防御の楯となる。

起きている状態と呪い

黒魔術師はいけにえに危害を加えるために、常に忍耐強く、悪意をもって黒魔術を行使する。原因不明の病気になった患者のうち幾人かは、「呪われた」と言ってしばしば診療所に駆け込む。一般には、医師はそのような人々に対して、鎮静剤をはじめあらゆる種類の神経用剤を処方する。しかし薬を服用しても症状は悪化するばかりである。

黒魔術が犠牲者に害を与えるために最もよく行う、最も忌まわしい方法の一つは、呪い人形を使ったものである。人形を使ってどのように呪うのか、闇の存在たちがどのようにそれを使うのかを説明するのはもちろん控えよう。なぜなら無責任にも、非人道的な輩にその武器を与えてしまうことになるからである。

症状と魔術治療

「人形」を通して攻撃を受けた人は容易に識別できる。大きな苦痛を感じ、心臓に激しい動悸が起こり、意気消沈し、脳、その中でも特にこめかみに刺すような痛みを覚える。心臓や肉体の他の場所にも痛みがある。そのような場合には、これらの「呪いをかけられた」患者を治療するために

儀式を行う必要がある。

まず、患者を白い布を掛けたテーブルを前にして椅子に座らせる。テーブルの上には、キリスト像、水の入ったグラス、火のついたロウソクを置く。そして治療者は患者の前に座る。関係者、例えば患者の友人、親族がいるならば、それらの人は誠実で深い信仰心を持ってテーブルの周囲に付き添う。

条件や準備がすべて整ったら、光の偉大なるマスターたちを呼ぶために次のインヴォケーションを唱える。

《 ソロモンのインヴォケーション 》

王国の威力、われの左足と右手の下に位置したまえ！

栄光と久遠、われの肩にふれ、勝利の道にわれを導きたまえ！

慈悲と正義、われの人生の均衡と榮譽となりたまえ！

知性と智慧、われに冠を与えたまえ！

マルクトの魂、寺院の建物を支える二本の柱の間にわれを導きたまえ！

ネツツァーとホッドの天使、イエソッドの立方石の上にわれをしっかりと立たせたまえ！ おー ゲドゥラエル！ おー ゲブラエル！

おー ティフェレット！ ビナエル われの愛となりたまえ！

ルアフ ホフマエル われの光となりたまえ！

御身のある姿、そして御身のあるであろう姿となりたまえ！

おー ケテリエル！ イッシム シャダイーの名においてわれを助けたまえ！ チェルビム アドナイーの名においてわれの力となりたまえ！

ベニー エロヒム 子の名において、サバオットの徳により、われの兄弟となりたまえ！ エロヒム テットラグラマトンの名においてわれの代わりに戦いたまえ！

マラヒム ヨーハーパウハーの名において、われを守りたまえ！

セラフィム エロアーの名において われの愛を清めたまえ！

ハスマリム エロアーとシェシナーの光彩によって われを輝かせたまえ！

アラリム 働きたまえ！ オファニム 回リたまえ 燦然と輝きたまえ！

ハホットハ カドッシュ 叫びたまえ 語りたまえ うなりたまえ

ほえたまえ カドッシュ カドッシュ カドッシュ

シャダイー アドナイー ホツチャバ エイエアセレイエ

ハレルーヤ ハレルーヤ ハレルーヤ

アーメン アーメン アーメン

《 賢者ソロモンの七の呪文 》

ミカエルの名において、ヘホバがおまえに命令し、遠のけるように
チャバホット！

ガブリエルの名において、アドナイがおまえに命令し、遠のけるように
ベリアル！

ラファエルの名において、エルチムの前から姿を消せ、サチャビエル！
サマエルサバオトにより、そしてエロヒム ギボールの名において、立ち
去れ、アンドラメレック！

サチャリエルとサチエルメレックにより、エルバーの前に従え、サナガブ
リル！

シャダイの神聖な、人間的な名により、そしてわれの右手のペンタグラム
の印により、天使アナエルの名により、ホッチャバであるアダムとイヴの
パワーにより、さがれリリット！、我らに手をかけるなナヘマ！

聖なるエロヒムにより、そしてカシエル、セアルティエル、アフィエル、
サライエルの神々の名により、オリフィエルの命令のより、さがれモロッ
チ！ 我々はおまえのえじきに、我が子をささげたりはしない。

アーメン アーメン アーメン

有害な流動体とラルヴァの火による破壊

さらに、被害者の傍らに真っ赤に焼けた炭を入れた火おけを置いておく
とよいだろう。魔術師は被害者の患部に右手で素早く、そして力強く磁気
的な手かざしを行う。それから被害者から取り去った有害な気（流動体）
を真っ赤な炭火に強く投げつけるのである。また一枚の皿に塩とアルコール
を置いておくことを忘れてはならない。この塩は、前もって次のエクソ
シズムを行っておく必要がある。（ラテン語で唱える）

《 塩のエクソシズム 》

In isto sale sit sapientia, et ab omni corruptione
servet mentes nostros et corpora nostra, per
Hochmael et in virtute Ruach-Hochmael, recedant
ab isto fantasmata hylae ut sit sal coelestis, sal
terrae et terris salis, ut nutrietur trituras
et addat spei nostrae cornua auri volantibus. AMEN

* 発 音

イン イスト サーレ シット サピエンティア、 エト アブ
オムニ コルプティオーネ セルヴェット メンテス ノストロス
エト コルボラ ノストラ、 ペル ホフマエル エト イン
ヴィルトウーテ ルアフ ホフマエル、 レセダント アブ イスト
ファンタスマータ ヒラエ ウト シット サル コエレスティス、
サル テラエ エト テリス サリス、 ウト ノトリエトゥールボス
トリトゥランス エト アダット スペイ ノストラエ
コルヌア アウリ ヴォランティス。 アーメン。

その次にアルコールに火をつけ、塩と一緒に燃やす。同時に、ソロモン
のインヴォケーションを唱える。

セレモニーを終える際、テーブルの聖水を患者に飲ませる。その水には
既に神聖な薬が含まれているからである。

聖トマスは、魔力に対してはサルビアとヘンルーダを使用しなければなら
ないと言っていたが、飲用だけでなく、いぶしてその芳香で部屋を満た
すこともできる。

ここで明らかにした人形で呪われた患者を治療するための方法は、あら
ゆる種類の黒魔術との戦いに好結果をもたらすものである。

黒のエレメンタル、コウモリ

黒魔術師は犠牲者を病気にさせるために、「人形」の他に、ある動物の
“エレメンタル”を用いることさえある。そのことを学徒に警告しておこ
う。このように、黒魔術師は数知れない方法^{ふち}を有し、それは不埒にも犠牲
者にあらゆる種類の害を及ぼす。

我々はこのタイプのある一人の黒魔術師を知っている。その魔術師は自
分の憎む人間に致命的な害を与えるために、吸血コウモリをその相手の家
に送り込んでいた。そのように、この闇の男は悪賢く、嫌らしいコウモリ
の群れを駆使して、黒魔術の「仕事」で裕福になった。その黒魔術師はそ
の小動物をバナナオイルで養っていたが、言うことを聞かないときは何の
餌も与えないで懲らしめていた。当然、我々はこの妖術師の用いる方法に
関しては沈黙を守る。我々は黒魔術を教えることはないからである。

魔女の捕獲

もちろん男の黒魔術師だけでなく魔女も存在する。魔女は我々がここで明かした肉体を四次元に入れるための秘訣を知っている。これを使って闇の領域に浸透し、遠く離れた場所へ移動し、人々に前代未聞の害を与えるのである。

しかしそのような魔女を捕らえることは容易である。床にはさみを十字の形に開き、犠牲者の室内に黒ガラスをばらまく。そうすれば魔女は落ちてくる。

客観的証明

魔女の存在を信じない一人の女性がいた。彼女も多くの人たちと同じように教養があり、知識人として生活をおくっていた。

さて、その女性がある都市に住む従姉妹を訪問したときのことであった。二人は、夕暮れに一羽の黒い鳥を目にした。それはクロコンドルかヒメコンドルのようだった。その鳥が中庭にある一本の木に止まり、そこから二人を嘲笑い、同時に彼女たちの会話していた言葉を真似て声に出していた。

その夜、従姉妹は何が起っているのか理解していたので、はさみを室内に十字形に置いて黒ガラスをばらまいた。

その結果は驚くべきものであった。中庭の木にずっと止まっていたあの奇妙な鳥は室内に入ってきて、ぱたぱたと羽ばたいてから、はさみの上に落ちたのである。そのとき、その光景を目のあたりにして、あまりのことに女性は啞然とした。鳥はやむなく一人の女に姿を変えた。女は全裸だった。従姉妹は怒って、毅然として魔女を手にとっていたムチで強く打ち、裸のままで通りへ追い出した。それからしばらくして、近所に住む人々が魔女に同情して体を覆うために何枚かの衣服を与えてやった。

このケースは実際にあったことである。

呪いによる斑点

呪いに苦しむ哀れな犠牲者は、身体中が黒色の大きな斑点でいっぱいになる。普通、医師たちはそのような不思議な斑点がどうして起こったのか、その原因を発見することも理解することも絶対にあり得ない。

しかし、ここで伝授した典礼の儀式によってそれらの斑点を治療し、消滅させることができる。だが、たった一回の治療で十分な効果が得られる

わけではないことを警告しておく。呪いによって生じたあらゆる病気はちょうど6か月の間、毎日忍耐強く、根気よくサイキック治療を続けてはじめて治るのである。

被害者がある有害な物質を飲み込んでしまったと懸念されるとき、毎日胃を空にした状態で、オリーブ油を一匙飲み、それを飲んで一時間してから雄のメキシコ茶を煎じて飲むとよい。それは「聖なる草」あるいは「ピコ」と呼ばれるものである。

聖イグナチウスのリマ豆と“黄色い水”

しかし重症で絶望的な場合は、断食させ、聖イグナチウスのリマ豆を与えることによって洗浄できるだろう。これは極めて瀉下効果のあるアーモンドである。それによって黒魔術の犠牲者は有害物質を胃から吐き出すことができる。

またこの場合、“黄色い水”と呼ばれるもので胃を洗浄することもできる。この水の作り方は次の通りである。

1 リットルの黄色いびん1本または何本でもいいが、水を一杯入れる。そしてそれぞれのびんの水に黄色い植物性アニリンを1グラム加える。

びんにふたをして日光に2時間あてる。その後、有害物質に害された患者は一時間ごとにこの“黄色い水”をコップ一杯飲む。この治療を中断することなく、しばらくの間続けなさい。

葬式の汚れ^{けが}

それとは知らず不注意にも、“葬式の汚れ”によって、または別の類の怪物質（少なくとも忌むべき物質）によって害を受ける者がいる。

この場合も“黄色い水”を用いる。

“葬式の汚れ”を受け取って病気になった者は、次のような症状を見せる。その患者は痩せ過ぎでも太り過ぎでもなく正常だったのが、死体のように青ざめた土気色になったり、極端にやせ衰え病弱になり幽霊のようになる。それは骨が目に見えるほどである。その上、胃の中に絶えずボールのような固まりが動き回転しているように感じる。

そのような患者も“黄色い水”を用いて、また既に紹介した七の呪文、ソロモンのインヴォケーションを唱え、アルコールと塩を使う儀式によって治療することができる。

“葬式の汚れ”によって、ひどく害を受けた子供たちもいる。しかしこのケースは、人がうっかりと、知らず知らずのうちに害を与えてしまったものである。2才ぐらいの女の子がいたが、その子は体がまるで幽霊のように骨と皮ばかりになった。その子の家族が埋葬式に出席して共同墓地から戻ったとき、いつもしているように少女に触れたが、これはそんなときに起こるのである。このようにして、家族は命に関わる実体のない感染性の生命流動体でその子を汚してしまったのである。

この場合、医師たちはお手上げだった。われわれ寺院の兄弟たちは、ハッカを入れたミルク風呂に9回入浴させてその子を治療した。この風呂は簡単に準備できる。ハッカをミルクで煮出し、そのミルク風呂に病気の子供を入浴させるのである。それを9日かけて9回行う。その結果はすばらしいものであった。女の子は完治したのである。

邪眼

信じられないようなことだが、おそろべき催眠力を持った人々がいる。そのような人に子供が見つめられたならば、時としてその子是否応なしに死んでしまうことさえある。

症状：目の下の黒い大きなくま。頭に発熱。嘔吐、下痢。

このケースでは魔術師は子供の全身に「磁気的な手かざし（手のひら療法）」を行う。特に頭と顔に施す。この方法で、有害な流動体を取り除かれるのを想像し、それを直ちに赤熱した炭に投げ捨てる。この手のひら療法は、賢者ソロモン王の七の呪文を唱えながら行う。

一般に、都市においてこの病気が原因で多数の子供たちが死んでいる。医師が死亡証明書を作成する際には、子供の死因は腸の伝染病であると診断を下す。もし親たちが根拠のない非難をものともせず、この方法を子供の治療のために用いるならば、都市にいる多くの子供たちが救われるであろう。

“邪眼”は次の方法で避けることもできる。子供の指に金の指輪をはめさせるか、本物の珊瑚でできたプレスレットを着けさせる。または黒玉こはくを使ってもよい。

魔法円

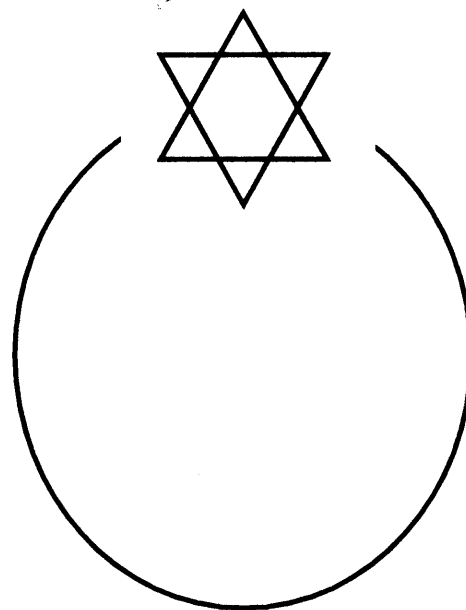
魔法円は闇の攻撃からの防御に役立つ。この円は完全に閉じる必要はない。円の軌道上をソロモンの印で封印すればよい。

このソロモンの印は、二つの反対向きの「三角形」からできている。光の三角形と闇の三角形である。前者はあらゆる人に存在する内なるクリストであり、叡智の光輝くドラゴン、つまり父、子、聖霊である。後者は三つの頭を持つ黒いドラゴンであり、心理的「我」である。この心理的「我」は、ヒラム・アビフ（同時にこのマスターは、人間の高位の三つ組、すなわち内なる神である）を殺害した「三人の裏切り者」で構成されている。

黒のドラゴンは三位一体から成り、アストラル体、メンタル体、コーザル体を支配する。このドラゴンは頭に毒ヘビを生やしたメドゥーサである。

すべての人は、ペルセウスの炎の剣で、そのメドゥーサの首を斬らなければならない。

黒魔術の攻撃から身を守るには、その魔法円をメンタリーに形成することを習慣にしておかなければならない。これは眠りに就く前に、または必要に応じて行うことができる。



第11章

白魔術と黒魔術

強迫観念や妄想に取り憑かれた人、悪霊に憑依された人

黒魔術師は、いかにして被害者を固定観念に取り憑かせるかということも知っている。

福音書には、これと同じように取り憑かれた人についてのケースが数多く記されている。一般には、降霊術の霊媒者は、アストラル界の下層に群がる“ラルヴァ”、さらには悪魔に憑依されている。

これらのケースでは患者の前で次の祈念を唱えれば治る。

《 四の呪文 》

カブット モルトウン、 インベレット ティビ ドミヌス ベル

ヴィウム エト デヴォトウン セルベンテム！

チェルupp、 インベレット ティビ ドミヌス ベル アダム

ホッチャバ！

アキラ エランス、 インベレット ティビ ドミヌス ベル アラス
タウリ！

セルベンス、 インベレット ティビ ドミヌス テットラグラマトン、
ベル アンジェルム エト レオネム！

ミカエル、ガブリエル、ラファエル、アナエル！

フルアット ウドール ベル スピリトゥム エロイム

マネアット イン テーラ ベル アダム ホッチャバ！

フィアット フィルマメントウム ベル イアフヴェフ サバオト！

フィアット ジュディシウム ベル イグネム イン ヴィルトウテ

ミカエル！

死んだ目の天使 この聖水に従え 消え失せろ！

羽根のついた雄牛 この剣で刺されたくないのなら 働け 土にもどれ！

鎖につながれたワシ この印に従え この一吹きに消え失せろ！

変わりやすい蛇 われの足もとにはいつくばれ

さもなくば 聖なる火によって 苦しみもだえさせられるだろう

そして われのたく香とともに 蒸発せよ！

水は水にもどるよう 火は焼き焦がすよう 空気はめぐるよう

明けの明星であるペンタグラムの効力により

そして光の十字の中央に書かれたテトラグラマの名により

土は土の上に落ちるよう

アーメン アーメン アーメン

^{リチュアル}
儀式：前章および『神聖魔術秘教コース』の中にあるように、「ソロモン王の七の呪文」を唱えることもできる。

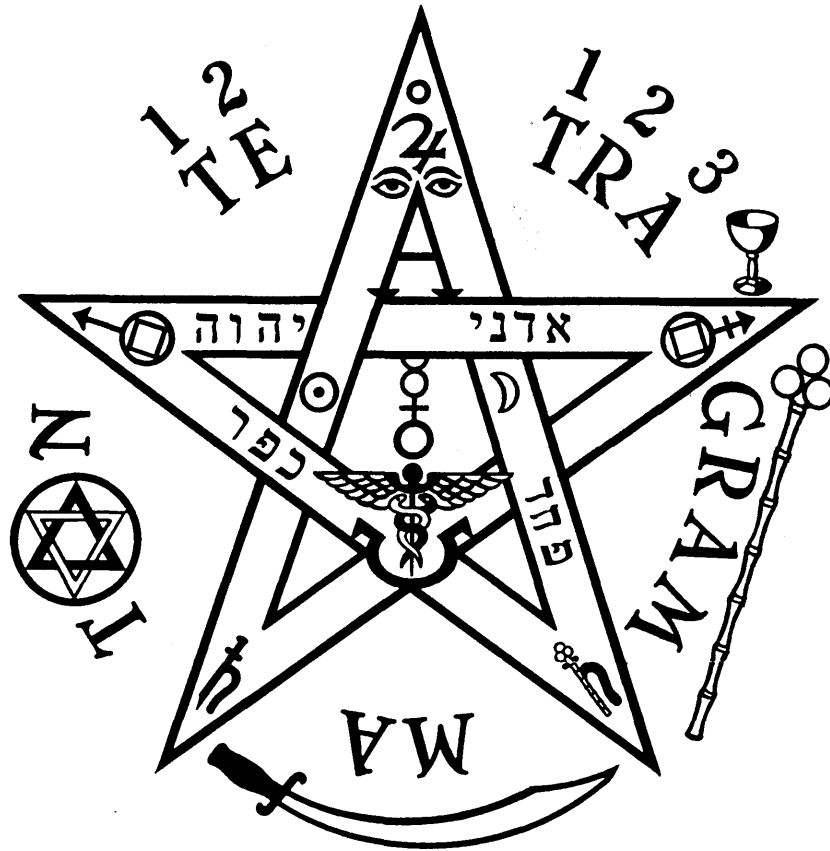
それに加えて、患者の前でサルビアとヘンルーダを赤熱した炭の上で燃やすこともできる。その効果は前章で説明済みである。

次頁のイラストのような「ソロモンのペンタグラム」をドアの入口に描いてもよい。

五芒星の上の一角を内側に向け、反対の二角を外側に向ける。それを床に炭で描くのである。

その後で闇の実体に命じる。

「クリストの名において、クリストのパワーによって、クリストの威厳によって、犠牲者の身体から立ち去れ！」



憎 悪

黒魔術師は人々に憎悪を抱かせる。その敵たちは、黒ロッジにそそのかされて攻撃を仕掛けるのである。

もし自分自身を節制し、自制し、あるいは克己する術を知らなければ必ず失敗し、イニシエーションの道から逸れてしまうだろう。

次に述べる鍵によって、敵を抑え、その憎悪を消滅することができる。

寝床に横たわり全身の筋肉をリラックスさせる。それから敵のハートに意識を集中しながら寝入る。その人物のハートがあたかも無限の愛を宿す礼拝堂のようにイメージする。そして心の中でそのハートの中にあなた自身の姿を描きなさい。あふれるばかりの愛で満ちた姿を描きなさい。次に、その敵の眉間を見つめているイメージをしなさい。その人の眉毛の間、マインドの内部に、強い愛で満ちたあなたの姿を描くのである。このエクササイズでは、あなたに憎悪を抱く人に対して真実の愛を感じることが必要である。愛するふりをするのではなく、あなたを憎む人、敵に対して真実の愛を感じるまでになること、それが必要不可欠である。もしそれにもかかわらず、依然としてその人物があなたにしつこく害を与えようとするならば、竜舌蘭リョウゼツランを用いる必要がある。

竜舌蘭のエレメンタル

まず郊外に行き、野原で竜舌蘭を捜す。そして地面に小さな棒で竜舌蘭の周囲に右から左へ円を描く。円の大きさは、その植物の周囲が8クアルタ（手の親指と小指を張った長さが1クアルタ；約22cm）ぐらいでよい。それから竜舌蘭に祝福を与え、この植物の“エレメンタル”に、自分に敵意を抱く人（自分はその人の行いを阻止しようとしている）の所まで行って、「その悪意を崩壊してくれるように」懇願するのである。そしてナイフで葉の一部を切り取り、その葉片を両手にはさんで、不屈の意志をもって竜舌蘭の“エレメンタル”に絶対的に従うよう命じるのである。直ちに敵の所へ行って、その悪意ある考えを崩壊するようにと。それと同時にマントラを発音する。

マントラ：この儀式を実践している間中、次のマントラを発音しなければならない。

リビブ レノニナス レノノン
LIBIB LÉNONINAS LÉNÓNON

それぞれの文字を鐘の音のような響きで発音する。その結果は驚くべきものである。このようにしてそのエレメンタルは敵の悪意ある思考、憎悪の感情を根絶してくれて、その人物はあなたの友となる。しかしこのエクササイズの基本は、敵意を持つ人物を深く心の底から愛するようになることである。

また緊急かつ重大な場合、次に述べるマントラによって敵から防御することができる。

クリム クリシュナヤ ゴヴィンダヤ
KLIM KRISHNAYA, GOVINDAYA,
ゴビハナ ヴァラバヤ スワハ
GOPIJANA, VALLABHAYA, SWAHA

悪 癖

闇の実体は人を道から逸脱させたり、大きな害を与えるために、しばしば悪癖に走る人間の弱さを利用することがある。アルコールや麻薬の飲用、あるいは姦淫などがそうである。

白ロジのあらゆるマスターや弟子は、それらすべてを慎んでいる。

アルコールに関して言えば、ビールは小さなグラス（ワイングラス）三杯までは少しずつ飲んだり味わったりすることが許される場合もある。しかし四杯は法を犯すことになる。

劇場は黒魔術的なイメージや見世物であふれている。というのは黒魔術は劇場を支配下に置いているからである。例えば、観客はボルノ的なシーンに見とれたり、二重の意味を持つ言葉や悪意ある言葉に耳を傾ける。これらの気違いじみた娯楽の闇の要素は、網膜と聴覚を傷つけてマインドにまで浸透する。そのとき、各人の心理的「我」が干渉してメンタル界に「生きた」像を作り出す。それは観客の心を奪った映像と全く同じものである。その像は「意識」を持ち、睡眠中にその観客が何度も姦淫を犯すことによって本物の「メンタルな悪魔」となるのである。——当然のことだが、それによって夢精が起こる。

映画はさらにひどい。映画館は劇場よりその数も多く、プロデューサーが映像に印象づけたものはあまりにも有害だからである。ノーシス学徒は映画館に行くべきではない。

近頃では、不幸なことに悪化の一途をたどり、劇場と映画館はまぎれもなく真の黒魔術の寺院に変わり果ててしまった。そこでは秘密であれ、公開であれ、黒魔術が実践されている。そして人々のメンタル層に害を及ぼ

している。

嘆かわしいことであるが、状況はますます悪化しており、いわゆる「夜の盛り場」とともに、昨今の若者に余りにも大きなダメージを与えている。

学徒はそれらの不浄な誘惑から、いかにして身を守るかを知らなければならない。たとえ本人は気づいていなくても、莫大なルシファーの力を内に秘めている女性がいる。多くの場合そういう女性はそれほど美しいわけではない。しかしルシファーに仕えているのである。それゆえに純真な学徒はそれらの女性に対して抵抗できない魅惑を感じ、それと闘うことになる。しかし最後には堕ちて、その魅力に破れ、致命的行為を犯してしまう。そしてイニシエーションの道から逸れるのである。それらの女性はルシファーの力で弱者を実際に催眠術にかけ、魅了する。

さて、それらのおそろしい誘惑から身を守るための神聖な鍵がある。それは我らの父に対して熱心に祈り、焦らず、強い意志をもって瞑想することである。

否定的な文化活動

闇の存在は、おそろしいまでに知的である。我々は優れた才能と知力を持つ黒魔術師を知っている。それらの闇の存在は、秘教学徒を真実の光の道から逸らすための手段として、その学徒のインテレクトを利用する。ルシファー崇拜者は異常なほど知的であり、しかもその上射精を好むのである。

軍隊や役人の社会を見れば、その様々な局面で知的な闇の存在が干渉したり、影響を与えているのがわかる。

これらすべての有害な、正道を外れた主知主義に対して、秘教学徒は自分自身を防御する。そのために光の道の探究家のように、高次元に向かう志願者のように、自分自身のハートの声に耳を傾けるのである。自分の心の声に、自身の内なる神性、内なる神の声に耳を傾けるのである。

偽預言者

すべての偽預言者は姦淫者である。それゆえに、射精を勤めるあらゆる預言者は偽りの預言者であり、彼らは闇の存在、黒ロジに従っている。

「あなたがたは、その実によって彼らを見分けるであろう」。

（『マタイ』7：6）

“エレメンタリー”の干渉

“エレメンタリー”はしばしば人に害を与え犠牲者とする。エレメンタリーには、ファンタズマ、カバール、インクブス、スクブス、ドラゴン、バシリスク、アスピス、レオなどの様々なタイプがある。（詳しくはフランツ・ハルトマン著の『エレメンタル(The Elementals)』参照）。

インクブスは性液を漏らす女によって生み出される。スクブスは同様に射精する男によって生み出される。インクブスの性別は男性で、スクブスは女性である。これらのエレメンタリーは生みの親に対して、自分に生命を与えてくれたその行為を繰り返させようとする。そして、それを生んだ人間の生命体を犠牲にして生きていく。そのようなとき肉体はエレメンタリーの寄生によって衰弱している。

このインクブスとスクブスはあぎを用いて消滅させることができる。あぎを赤熱した炭の上に置き、その香によって雰囲気洗浄する。それでそのラルヴァを消すことができる。

また靴の中に硫黄をいれて歩くことも、得策である。硫黄から生じるエテリックな蒸気が、それらの危険なラルヴァを消滅してくれる。ファンタズマは夜にさまよい、性エネルギーを消耗する姦淫者の寢床に侵入する。そして漏れた精液をはらまして、そこからあらゆるタイプの無数のラルヴァが生じる。

硫黄とあぎは、それらすべてのラルヴァを根絶する。

ドラゴンと呼ばれるラルヴァは、売春婦の寝室によく侵入する。それは精液から生じるが、硫黄とあぎによって消滅する。

“エレメンタリー”によって、ノーシスの学徒は誘惑の奈落に落ちていく。それゆえに、すべての学徒は硫黄とあぎを使用すべきである。

黒魔術師はそれらのラルヴァをすべて駆使して、学徒を道から逸らせ、傷つけるのである。

第12章

ヴァルカンの 燃えさかる炉

聖なる「8」

著作『メジャー・ミステリー』(The Greater Mysteries)の中で、人間は性の扉からエデンの外へ出たということ、そしてその扉を通ってのみ、再びエデンに入ることができるということを既に述べた。エデンはまさに性そのものである。

マックス・ハインデルによれば、無限の印である聖なる「8」が地球のハートの中に存在するという。そのことは、正覚を得た偉大なるマスター、ヒラリウックス9世(Hilariux IX)も語っている。

まさに、この無限の印はパワーの鍵である。その中に惑星の知性の脳、ハート、性がシンボリックに配置されている。

ところで、その聖なる「8」を図形で表現すれば、「8」を形作る二つの円はそれぞれ性と脳である。その「8」の中央で二つの円が結び合わされるが、それがハートを象徴している。

人間の運命の中で引き起こされる闘いはおそろしいものである。性に対抗する脳の闘い。脳に対抗する性の闘い。そしてさらに驚くべき苦痛を伴う闘いがハート同士の闘いである。このことは、心から愛したことのある

者は理解できるだろう。

聖なる「8」とマーキュリーの杖

聖なる「8」はそれ以外にも、脊髄に巻きついてマーキュリーの杖を形成する二つの神経経路、つまり既に本書で触れた、東洋で言われるところの「イダ」と「ピンガラ」を表現している。

前に述べたように、それらの神経経路の一方にそって火が上昇し、もう一方にそって水が上昇する。プレゲトンの火とアケロンの水が第九球体で交差し、無限の印を形成するのである。

聖なる「8」と額チャクラ

聖杯の騎士、エルサレムの王子、寺院の門番である偉大なるマスター、ヒラリウックス9世が語ったところによると、額チャクラの場所に無限の印があるのを想像し、チベットの神聖な教団について瞑想するならば、秘教学徒は意識的に肉体から「離脱」し、アストラル界に自分自身を現すことができるというのである。そして、いかなる時でも自分が寺院にいることを意識する。そうするとそこでおびただしい試練にさらされ、その後に「口伝」で壮大な「アルカーノA. Z. F.」を授かる。実際、 $F + A = C$ は Fuego (火) + Agua (水) = Conciencia (意識) である。

もちろん、神聖化の手段としての第九球体(性)の火と水は、内的世界で学徒の意識を目覚めさせる力を持っている($F + A = C$)。

このことから、アボカリプスの二人の証人が「預言」の力を授ける理由が説明できる。

ヴァルカンの炉

第九球体の中には、ヴァルカンの燃え盛る炉が存在する。その炉とは性のことである。そこへマルスが剣を焼入れして強くし、ヴィーナスのハート(金星のイニシエーション)を征服するために降りていく。ヘルメスは神聖なる火を用いてアウゲアスの牛小屋(霊の牛小屋)をきれいにするために、ペルセウスは炎の剣を用いてメドゥーサ(サタン、心理的我)の首を斬るために降りていく。このメドゥーサの頭には蛇がうじゃうじゃいるが、学徒はそれを智慧の女神ミネルヴァに引き渡さなければならない。

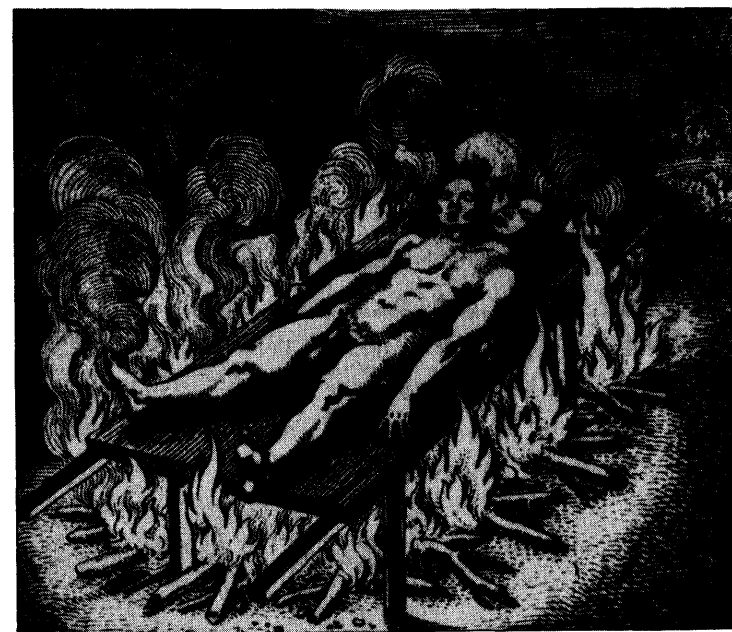
ヴァルカンの燃え盛る炉を用いてのみ、金星のイニシエーションを達成

することができる。

ヴァルカンの燃え盛る炉を用いてのみ、絶対的な浄化が得られるのである。

ヴァルカンの燃え盛る炉を用いてのみ、我、私自身、尊い聖書に出てくるサタンの首を斬ることができる。

バガヴァド・ギータの中で述べられている「九門の神聖なる町」に入ること望む者は、ヴァルカンの燃え盛る炉に降りていく決心をしなければならない。



ヴァルカンの炉の中のアンドロジヌス
ヴァルカンの炉とは性の秘儀のことである。秘儀の間、男女はアンドロジヌス(両性具有)となり、性の火でエゴが溶解されて、黄金が精錬される。やがて、驚くべき人の子、太陽人間が誕生する。

狭き門

神に到る道は数多くある、と誤信している秘教学徒がたくさんいる。しかし神聖で偉大なるマスター、イエスは「門は狭く、光に至る道は細い。そしてそれを見出す者は、ごく少ない」と語っている。

もし秘教学徒が四つの福音書を隅々まで詳しく、根気よく読むならば、イエスは決して多くの道があるなどと言っていないことを納得するだろう。つまり尊敬すべき世界の救世主は、一つの狭き門、一つの細く困難な道だけを語ったのである。その門とは「性」である。その道とは「性」である。神に到る道は他には存在しない。いつの時代にも、「性」以外の門を知る預言者は一人もいなかった。

独身を否定した性の秘儀

ヴァルカンの燃え盛る炉において、鉛を黄金へと変換することができる。その中で錬金術の黄金の子が誕生する。その驚くべき子は、人の子、太陽王、太陽人間である。

勘違いし、混乱し、誤った秘教学徒の中には、この教義に異議を唱え、ピタゴラスやゾロアスター、イエスその他のイニシエイトたちが独身であり、決して妻をめとらなかったと主張する者がいる。

あらゆる密儀の神殿では、女神ヴェスタに仕える神聖な処女たちが存在した。唯物主義者、不敬な輩、悪意を持つ者は独断的にその女性たちを「神聖なる売春婦」と呼ぼうとした。しかしながらこれらの処女たちは、真実、「奥義に参入した処女」であった。たとえ、生理学的に処女の体ではなかったとしても、秘教的な意味での処女であった。

高位イニシエイトとアルカーノA. Z. F.

寺院のイニシエイト、ピタゴラス学派、ゾロアスター学派、イエス学派のイニシエイト、それらあらゆる古代のイニシエイトたちは、例外なく実際に寺院の処女たちとアルカーノA. Z. F. を実践した。彼らはペルセウスの炎の剣でメドゥーサの首を斬るために、ヴァルカンの燃え盛る炉に降りて行かなければならなかった。霊の牛小屋を洗浄し「意識の神聖な飼料葉おけ」の中で「言葉」を受肉（具現）するために、その燃え盛る炉に降りなければならなかった。

その燃え盛る炉の中でのみ、それらの偉大なるイニシエイトたちは自分

の武器を鍛え、金星のハートを征服することができるのである。

太陽のグラン・オブラ

神のもとに上昇するためにはいくつもの道が存在すると考えている人々は、太陽のグラン・オブラ（大作業）には水と油が必要であることを全く知らない。水が半分、油が半分必要である。寺院の二本のオリーブの木を流れる純金の油は、変換された創造エネルギーである。油の二人の子供たちは神聖な湖、ジェネザレス（Jenezareth）湖で誕生する。その神聖な湖とは精のうである。そこには生命の純粋な水が存在する。その生命の純粋な水を飲む者は決して渇きを覚えることはないであろう。しかしながら、その門は狭く、光へと導く道は細い。

それゆえにあなたがたに言う。わが魂の兄弟よ、狭く細い困難な扉から入るように努めなさい。何故なら、真実あなたがたに言うが、入ろうとしても入れない人が多いからだ！（『ルカ』13:24）

災いなるかな、地に住む人々は！（『黙示録』8:13）

災いなるかな、ヴァルカンの燃え盛る炉に降りてこない人々は！

災いなるかな、第九球体を蔑視する人々は！

災いなるかな、生命の純粋な水と寺院の聖油を拒絶する人々は！

彼らは、生まれてこないほうがよかったか、ひきうすを首に掛けられて海の深みに身を投じたほうがよかった。

これらの人々は墮落した者たち、第五人種（アーリア人種：我々のこと）において失敗した者たちである。

寺院の処女たちが司祭の準備をしたというのは驚くべきことである。彼女たちゆえに、言葉は常に「無原罪の御宿り」の子である。言葉は常に神聖な処女たちの子である。

最大の試練

第九球体に降りることは、古代の神秘において秘儀司祭の至高の位階を獲得するための最大の試練であった。ブッダ、ヘルメス、ラーマ、ゾロアスター、クリシュナ、イエス、モーゼは、世界、獣、人間、神々の起源である火と水のワークを行うために第九球体に降りて行かなければならなかった。

すべての真正な白のイニシエーションはそこから始まる。第九球体とは性のことである。人類は胎児の状態で子宮内に九か月宿る。またレア、シベレス、イシスという母なる自然の胎内に人類が存在するのも九年間である。

さあ、これで我々がなぜ性のことを第九球体の領域と名づけているかが理解できるだろう。すなわちヴァルカンの燃え盛る炉とは、つまり第九球体のことである。

* * *

第13章

アカーシャ

アカーシャは音であり、言葉である

この著述も終わりに近づいてきた。

本書の趣旨は、黄金の言葉を話すのを学ぶことにあった。人間の使命は、オルフェウスのリラ（七弦琴）をかき鳴らすのを学ぶことである。その驚異的なリラとは創造的な喉のことである。

人間の使命は言葉を受肉することである。地球は単に言葉が凝結したものに他ならない。万物はエーテルに由来し、エーテルに帰する。エーテルのさらにその奥には“アカーシャ”がある。アカーシャは深遠で神聖な青色のスピリチュアルなエッセンスである。それは無限の宇宙全体に浸透し、満ち満ちている。そしてエーテルは純粋な“アカーシャ”がまさに凝結したものである。

アカーシャの特質を「音」とするならば、“プラーナ”という言葉がふさわしい。確かに音はロゴスに由来する。そしてアカーシャはあらゆる魔術操作の基本的作因なのである。

アカーシャはクンドリーであり、アニマ・ムンディである。この世において専念すべきことは、とぐろを巻いた蛇、かのクンドリーであるアニマ・ムンディを性の秘儀を通して目覚めさせることである。そうすることによってのみ、黄金の偉大なる言葉を聞くことができるのである。

アカーシャから万物が発生する。アカーシャ・ヴァニは声であり、ロゴスに由来する言葉である。ロゴスの言葉はアカーシャの中で具現化する。

アカーシャとタットワ

ヴァユ・プラーナとは純粋なアカーシャの音波である。

アカーシャがエーテルに凝縮するとき、これらのヴァユ・プラーナは、「テジャス：火」、「ヴァユ：空気」、「アパス：水」、「プリトヴィ：土」に変化する。これらはタットワであり、ラーマ・プラサッド(Rama Prasad)によって詳しく研究されている。

すべての炎に火のエーテルが存在し、空気にはガス状のエーテルが、水には液体状のエーテルが、土には石質のエーテルが存在する。これらはタットワである。そしてこれらすべてのタットワの実質は、ヴァユ・プラーナ、つまり、音波、言葉、偉大なる言葉である。

地球が火、空気、水、土の四大要素と共に凝縮する以前には、エテリック状の四大要素と共に存在していた。タットワが凝縮するとき、エテリックな要素が物質的な要素に変化する。

アカーシャは実際に音の凝結物である。このタットワは、アヌパーダカ(Anupadaka)から発出するスピリチュアルな物質である。この用語は「親なくして」「それ自身で存在する」という意味を持つ。さらにアカーシャの上に物質の根本的要素が存在する。

アヌパーダカの上に“アーディ”があり、アーディの上に“アイン・ソフ”、つまり人間の超神聖原子が存在する。

マントラ「インヴィア」

創造主ロゴスは言葉として、音として表現される。人間が話すべき黄金の言葉が存在する。人間が「ヒーナス」のパラダイスから追放される以前は、偉大なるユニヴァーサル言語、黄金の言葉だけを話していた。それは完全な文法から成っていた。古代エジプトの偉大なる秘儀司祭たちは、「至福の楽園」を訪問したいと望むとき、俗に“鹿の目”という名で知られるアーモンドを一粒右手で握りながら、深い瞑想に入っていた。

そのとき、このマントラを唱えていた。

インヴィア
INVIA

このマントラは真実のインヴォケーションである。その影響下では、このアーモンドのエレメンタルは何ら抵抗することなく応じるだろう。その植物のエレメンタルは、「ヒーナス」の状態に身体を置く力を持っている。

秘儀司祭は、自分の身体が足から上に向かって脹らみ始めるのを感じたとき、身体が「ヒーナス」の状態になったと理解した。そして信仰心をもって寢床から起き上がり、完全に「至福の楽園」へ身体を投げ、地球上の様々な場所へ移動したのである。

このエクササイズを実践したいと思う者は、“鹿の目”というアーモンドのエレメンタルについて瞑想しながら、眠りに就きなさい。

「オグアラ (Oguara)」という名の「ヒーナス」の偉大なるマスターが存在することを、秘教学徒に知らせておこう。そのマスターは自分を呼ぶ者のところに必ず駆けつけて、四次元に肉体を投じるのを助けてくれるだろう。

ヒーナスのユニヴァーサルな言語

「ヒーナスのパラダイス」では、生命の偉大なるユニヴァーサル言語が使われていた。例えば、「私は大きな犠牲を払い、ここで自分の使命を果たしている」と言おうとすれば、この文章は偉大なる光の言語のマントラを用いて次のように表すことができる。

ルテネール マスレイム アエオドン
LUTENER MASLEIM AEODON

「私はあなたがたと共に、もう少しばかりここにいる」と言うときは、黄金の言葉ではこうなる。

マスレイム ウリム セイダウ
MASLEIM, URIM, SEIDAU

これはエデンの全住人が話すユニヴァーサルな言語である。そして古代の神聖な人類が表現するのに用いた言葉であり、「至福の楽園」から追放される直前まで使われていたものである。

もう一つ例を上げよう。「我々の主、イエス・キリストの受難」は、次のようになる。

ティアナ パーナ
TIANA PANA

我々ノスティックの寺院は、黄金の言葉で次のように呼ばれる。

^{ルミカレスク} LUMICALESC ^{ノスティコ} GNOSTICO

さらに、第四の道（メンタル界）を通り抜ける者はみな、メンタル界の寺院参入を許可する「合言葉」をよく覚えておかなければならない。この言葉は次のようになる。

^{アダクリフト} ADACRIPTO

基数「1」、「2」、「3」は^{エバ}EBA、^{ドバ}DOBA、^{ドゥスナ}DUSNAと表現される。光り輝く叡智のドラゴンのこれら三つの原理が、あらゆる魔術実践の基礎になるのである。

不徳な行為

本書ではあらゆる力の鍵、そしてあらゆる帝国の鍵を伝授した。

アカーシャは音であることが証明された。

クンダリニーはアカーシャであることが証明された。

クンダリニーは音であることが証明された。

我々はクンダリニーを目覚めさせて、黄金の言葉を話す。なぜならクンダリニーは人間一人ひとりの中で言葉が凝結したものだからである。そのことが証明された。

クンダリニーは性的であることが証明された。

性の秘儀を通してのみ、クンダリニーを目覚めさせ、光の言葉を話すことが可能となる。そのことが証明された。この神聖な言語では「不徳な行為」は次のように表現される。

^{ゴーレ} GOLE ^{ゴレテーロ} GOLETERO

さて、秘教学徒はあらゆる“不徳な行為”を慎まなければならない。行わなければならないのは、家庭内で女司祭（巫女）としての妻と共に行う「アルカーノA. Z. F.」（性の秘儀）だけである。何人もの婦人とアルカーノA. Z. F. を実践する者は、法を犯し、「淫ら」であり、姦通者である。

慎み深く、純粋で、貞節、素朴である方がいい。また一方でさらに価値あることは、最大の敵を愛することであり、憎む者の足に口づけし、殴る

手に接吻し、身体を傷つける鞭を愛撫することである。そしてさらに気高いことは、我々を憎む者を愛するということである。そう、なぜなら、彼らが憎むのは我々を理解していないからである。さらに我々を愛する者をもっと愛すること。また悪に対しては善で報いること。そして悩める哀れな人類に対して、血の最後の一滴までも与えることである。

本書で提供した光の言語、そしてまた証明した力の言葉・マントラを学ぶのは大変すばらしいことである。

もし人間が光の神聖な音楽的表現を学ぶことができなければ、その言葉はまさしく毒舌にふさわしく、邪悪な奈落へと降りていくことになる。

ここで、いくつかの暗示的な言葉を引用してみよう。

マスター・クリスト

1. 「私の兄弟たちよ。あなたがたのうち多くの者は教師にならないがよい。

私たち教師が、他の人たちよりも、もっと厳しい裁きを受けることが、よくわかっているからである」。

マスターの中のマスター、それはただ一人、「完全なる複合統一体」の「クリスト」その人である。しかしながら、彼を具現する者はみな、真のマスターになる。

愛の言葉

2. 「私たちはみな、多くのあやまちを犯すものである。もし、言葉の上であやまちのない人があれば、そういう人は全身をも制御することのできる完全な人である」。

学徒の言葉は無限の愛、無限の優しさ、無限の調和、無限の平和で包まれているべきである。なぜなら、不調和な言葉は下劣ではないが、攻撃的、破壊的だからである。怒りに満ちた言葉、皮肉を込めた言葉はみな、殺人用の短刀であり、それはメンタル界において隣人の意識を傷つける。

言葉（舌）の支配

3. 「馬を御するために、その口にくつわをはめるなら、その全身を引きまわすことができる」。

進化しようとする人、少なくとも意識的にアストラル体で離脱できるようになりたい人、メンタル体で旅をする能力を何としても得たいと思っ

いる人、純粋な霊的世界で意識的に行動できるようになりたいと決心する人は、自分の舌を支配しなければならない。

自慢する自分の内なるサタン

4. 「また船を見るがよい。船体が非常に大きく、また激しい風に吹きまわられても、ごく小さなかじ一つで、操縦者の思いのままに運転される」。
5. 「それと同じく、舌は小さい器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか」。

私は偉大なるマスターである。私は偉大なるイニシエイトである。偉大なるパワーを持っている。天才の生まれ変わりである。何々という英雄である—— と言う人々はみな、たとえ実際にその通りであったとしても、自分は俗界の王子であり、自分のサタンがこれらすべてのことを自慢しているのだということを知るべきである。実際、誰一人として自慢したり自惚れたりしてはならない。なぜなら、人間としてこの低い世界にいる限り、我々は惨めな罪人、粘土、土ばかりだからである。高次元の世界、天上においてのみ、人は絶対抽象空間の一個の超神聖原子なのである。

姦淫者の舌

6. 「舌は火である。不義の世界である。舌は、私たちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の火で焼かれる」。

兄弟である弟子たち、秘教学徒よ。舌は火であり、不義の世界である。アステカ人たちはチャプルテペック寺院（“ヒーナス”の状態にある）の中に、トナティウを表現した一つの彫刻を持っている。それは火の三角形の舌と勃起した男根を持つ。それゆえにこの彫像を見れば、言葉と性の秘儀の間に奥深い関係があることを理解できる。人間が姦淫を犯すとき、その舌は不義を話す。中傷、陰口、そしりは罪深い舌から生まれる。誰一人として人を裁く権利はない。何人も他を非難する権利はない。

自然を支配すること

7. 「あらゆる種類の獣、鳥、這うもの、海の生物は、すべて人類に制せられるし、また御せられてきた」。

実際、人間は言葉を用いて自然を支配することができる。例えばマント

ラで毒蛇を遠ざけることができる。

^{オーシー} ^{オーツァ} ^{アーシー}
OSI OSOA ASI

猛犬に対してはマントラ「^{スー}SUA」またはマントラ「^{パス}PAS」で追い払うことができる。

ロバに対しては母音「^オO」を用いる。

「^{チン}CHIN」を何回も繰り返せば豚を呼び寄せることができる。

コロンビアのサンタマルタのシェラネヴァダでは日照り続きのとき、インディアンのアラワク族は集まって一団となり、カエルの鳴き声を真似る。すると農作物に必要な雨が降るのである。

呪いの言葉、祝福の言葉

8. 「ところが、舌を制しうる人は、一人もいない。それは制しにくい悪であって、死の毒に満ちている」。
9. 「私たちは、この舌で父なる主を賛美し、またその同じ舌で、神にかたどって造られた人間をのろっている」。
10. 「同じ口から、賛美とのろいが出て来る。私の兄弟たちよ。このような事はあるべきではない」。
11. 「泉が、甘い水と苦い水とを、同じ穴から吹き出すことがあろうか」。
12. 「私の兄弟たちよ。いちじくの木がオリーブの実を結び、ぶどうの木がいちじくの実を結ぶことができようか。塩水も、甘い水を出すことはできない」。

道を歩む兄弟たちよ。塩水と甘い水とが同時に吹き出す泉などどこにもないことを知らなければならない。甘い言葉と苦い言葉を同時に語りながら道を歩むことはできない。また聖なる言葉と邪悪なことを同時に語ることもできない。あらゆる攻撃的な言葉は、真実の道からノーシス学徒をわきへ追いやる。凡人は他人を批判し、優れた人間は自分自身を批判する。

智慧を示すがよい

13. 「あなたがたのうちで、智慧があり物わがりのよい人は、だれであるか。

その人は、智慧にかなう柔和な行いをしていることを、正語（良い言葉）によって示すがよい」。

自分の智慧をたわいもなく自慢する者、自分自身を讃える者は、誰もい

ない塔に昇って叫び声を上げて自賛し始める愚か者である。真の賢者は隣人を批判する代わりに、正語（良い言葉）によってその行いを示し、謙虚さと柔和さで知恵を示すがよい。

悪魔の知恵

14. 「しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや党派心をいだいているのなら、誇り高ぶってはならない。また、真理にそむいて偽ってはならない」。
15. 「そのような知恵は、上から下って来たものではなくて、地につくもの、肉に属するもの、悪魔的なものである」。
16. 「ねたみと党派心とのあるところには、混乱とあらゆる忌むべき行為とがある」。
ねたみは学徒をユダに変える。一般的に、ねたみ心のある人はその師よりも賢者であると感じて、師を三十枚の硬貨で売り渡すまでになる。
17. 「しかし上からの智恵は、第一に清く、次に平和、寛容、温順であり、あわれみと良い実とに満ち、かたより見ず、偽りが無い」。
18. 「義の実は、平和を造り出す人たちによって、平和のうちにまかれるものである」。

（『ヤコブの手紙』3:1-18）

完全なる言葉

完全なる人間は完全なる言葉を話す。道を歩み続けることを望むノーシス学徒は、言葉を支配することを習慣としなければならない。そして言葉の扱いには、慎ましく、慈悲深くあるべきである。

例えば、他人の宗教、学派、宗派を批判する者は言葉に慈悲がない。実際に、残酷であり、無情にもなる。人間に害を与えるものは、人間の口から入るものではなく、人間の口から出ていくものである。その口から侮辱、陰謀、中傷、そしり、憎しみが出ていく。それらすべてが人間を傷つけるものである。すべての宗教は神聖なる黄金の糸で繋がれた貴重な真珠である。しかし、あらゆるタイプの狂信は避けなければならない。なぜなら狂信によって、人々に隣人に大きな害を与えるからである。他人を傷つけるのは下品な言葉や上品で芸術的な皮肉だけではない。不調和なアクセントを持つ^{こわね}声音もそうである。

結びの言葉

本書を終えることにしよう。

我々は秘教学徒だけではなく、本書を読まれた方も、光に至るための困難な門、狭くてまっすぐにそびえ立つ門から、中に入る決心をしていただきたいと願っている。

その門とは性である。

ノーシス学徒は、本書で述べたあらゆる教義を覚えておきなさい。

アカーシャは「性的」である。

クンドリニーは明らかにアカーシャと同じである。

アカーシャは女神クンドリニー、世界の女神なる母である。

実際に祝福された崇拝すべき世界の母は、クンドリニーの神聖なる蛇である。その崇拝すべき蛇は“ムラダーラ・チャクラ”に閉じ込められている。このチャクラは脊髄の基底部に位置し、その磁気センターは、その位置から明らかのように、「性的」である。

驚くべきことに、ムラダーラ・チャクラは生殖器と肛門の間に位置している。そのチャクラはイダとピンガラとスシュムナーが会合するところ、カンダの下にちょうど位置している。それらはアカーシャが性的であることを示している。

光の言葉を話したいと望む者は、クンドリニーを目覚めさせる必要がある。なぜならクンドリニーは、まさに疑いの余地なく「音」の凝結したものであり、さらに適切に言えば「音」の基本的要素だからである。

ムラダーラ・チャクラの位置は、シヴァナンダ (Sivananda)によれば、「肛門より指二本分上方、生殖器よりおよそ指二本分下方であり、ムラダーラ・チャクラの位置する空間の広さは指四本分」である。

クンドリニーが目覚めると、脊髄の中に入り、脊髄管にそって発達していく。そのとき背骨の七つのチャクラがすべて活動し始める。そのようにして地震、水、火、空気を操作するパワーを得るのである。

クンドリニーが喉に達すると、光の言葉を話す能力が得られる。

クンドリニーが眉間の高さに達すると、超視覚を得る。その人物は超視覚者となる。

クンドリニーが松果腺まで上昇すると、多面的超視覚、ポリヴィジョンと直観が得られる。

純粹なるアカーシャの神聖な蛇が父の原子が存在する鼻根の磁場に達す

ると、偉大なる「白ロジ」の大密儀の第一イニシエーションを授かる。

さて、蛇と共に働く仕事はすべて『ロゴス・マントラ・テウルヒア』に属する。そのため言葉を「性」と切り離すことはできない。絶対なる確信をもって言うが、言葉と「性」は密接な関係にある。すでに示したとおりムラダーラ・チャクラが位置するちょうどその場所には純粋なアカーシャ、つまりクンダリーニーと呼ばれる蛇の聖なる座が存在する。

祝福された世界の母神は、人間の中で蛇の姿をとっている。

世界霊、つまりプラトンの“アニマ・ムンディ”はムラダーラ・チャクラの中に閉じ込められている。そして偉大なる光の言葉を話すためには、それを脊髄の中央管を通して上昇させるために努力しなければならない。

頁を締めくくるにあたって、今まで理論だけで何も実践しなかった多くの学徒たちが「鍵」を見つけ出すことを、心から願ってやまない。すなわちそれは科学の方舟を開くことのできる「鍵」である。多くの兄弟たちが光を渴望し、それを求めてあらゆる図書館へ行き、詳細に調べ、莫大な量の書物を渉猟しているが、それにもかかわらずイニシエーションの「鍵」を見い出すことはできない。それを見て我々は深い痛みを感じる。

我々は本書において、本質的に実践的であろうと努めた。それゆえに我々は、光を渴望する者すべてがその渴きを癒すための「鍵」を与えたのである。我々は叡智のパンを提供した。空腹である者が容易にそのパンを受け取り、それで養われるために。

重要なことは、兄弟たちがよく注意して順序正しく熱心に『ロゴス・マントラ・テウルヒア』を第1ページから最後のページまで研究することである。

そしてここで説明し明らかにされたすべてのエクササイズを極限の忍耐をもって実践することが何よりも不可欠である。我慢できないという身振りすら捨て去らなければならない。そしてより良いことは信仰、愛、希望を持つこと、慈悲の心を実践することである。

我々が必要とするのは、まさしく我々自身の中で人の子を上昇させることである。

第1章

【ロゴス】 ロゴスとはギリシア語で「言葉」、「定義」、「理性」を意味し、全宇宙の究極的な存在（キリスト教のゴッド、ヒンズー教のイシュヴァラ、ゾロアスター教のアフラマズダ、イスラム教のアラー）を示す言葉である。このロゴス（宇宙神）は常に唯一の存在、一体の存在であるが、宇宙にエネルギーを与えるにあたって三位一体、三様の働きをする。三位とはキリスト教では、父・子・聖霊であり、ヒンズー教では創造神ブラフマ・維持神ヴィシュヌ・破壊神シヴァ、神智学では第一ロゴス・第二ロゴス・第三ロゴスと呼ばれている。

【金星のイニシエーション】 大密議のイニシエーションを通過した者には二つの選択がある。一つはニルヴァーナに残って何ら制限のない、神聖な空間の、無限なる特権を享受する道。もう一つは、苦しみ悶えている人類を救済するためにそのニルヴァーナの絶大なる特権を放棄して、涙の谷（地球）にとどまる道。後者の道を選ぶものは、後にこの金星のイニシエーションを得て内なるクリストを具現化する。

【洗礼者ヨハネ】 イエスの先駆者。神の国近きを預言し、ヨルダン川でイエスを始めとして多くの人に洗礼を施したが、ヘロデ＝アンティパス王の命で斬首された。エッセネ派に属したともいわれる。

【インティモノナド】 我々の内なる存在の本質、魂。

【テトラグラマトン】 TETRAGRAMATON.「聖四文字語」と訳される。ヘブライ語の神名ヨッド・ヘー・ヴァウ・ヘーのこと。ユダヤ人は神の名を口にすることを畏れ、「アドナイ (ADONAI)」または「エロヒム (ELOHIM)」を代用していた。

【アイン・ソフ (Ain Soph)】 ヘブライ語。一般には「無限なるもの」として解される。

【ネメシス (Nemesis)】 ギリシア神話で、応報天罰の女神。傲慢な者、不義にして富む者などを見のがさずに罰した。

【セラフィム（熾天使）、パワーズ（能天使）】 カバラの各セフィロト（ケテル・ホクマー・ビナー・ヘセド・ゲブラー・ティフェレット・ネツァー・ホッド・イエソッド・マルクト）がそれぞれ、キリスト教における熾天使・智天使・座天使・主天使・力天使・能天使・権天使・大天使・天使・イニシエイトに対応している。

第2章

【バベルの塔】 旧約聖書『創世記第11章』に記されている高塔。世界の言葉も民も一つだった頃、人々は町に塔を建てて、その頂を天に届けようとした。しかし神はその思い上がりを怒り、人々の言葉を乱し、互いに言葉が通

じないようにした。

【ペンテコステ】 過ぎ越しの祝いの後、五十日目に行うユダヤ人の祭り。「イエスの昇天後、弟子たちはペンテコステ（五旬節）の祭りを祝うために集まったが、その時、炎のような分かれた舌が現れて、一人ひとりの上にとどまった。すると、皆が聖霊に満たされ、御霊（みたま）が話させてくださる通りに、他国の言葉で話し出した」。（『使徒行伝』 2:3-4）

第3章

【ヤンブリチウス(Jamblichus)】 AD 250～325 頃。ギリシアの哲学者として知られる。プロチノスの思想を発展させ、新プラトン学派を始めた。

【アーノルド・クルム・ヘラー】 1876～1949。偉大なノスティックのドクター。バラ十字会の一員。ベルリン大学医学教授。別名ウィラコッチャ。著書『ノーシス教会』で完全なる結婚の道について述べている。

【プルシャ(Purusha)】 サンスクリット語で「人」の意。インドのサーンキヤ学派の言葉で、プラクリティ（物質的原理）に対する純粹精神。この学派はこれらの二原理によって世界の創造や精神の至福を説明する。

【世界霊】 ラテン語ではアニマ・ムンディ (Anima mundi)。人間の靈魂との類比で、全世界を有機的に統合する生命原理として想定された靈魂。

第4章

【ダグドゥーパ】 未詳

【ボン教】 仏教伝来以前のチベット民族宗教。物質そのものに生命を認め、すべての物質は生き、活動し、心を持つとみなす物活論を説く。仏教と融合してラマ教が成立。

【紅帽派】 ツォンカバ (1357～1419) の興した、黄帽派成立以前のラマ教諸宗派の総称。

【サナート・クマラ(Sanat Kumarat)】 金星からやって来たと言われる偉大なマスター。1800万年以上、肉体を持ってこの地上に存在している。

【カーリー女神】 サンスクリット語で「黒き人」。死と破壊の女神でシバの配偶神。バルヴァティの異名。

【ニコライタス】 未詳

第5章

【ヒーナス(Jinas)】 肉体ごとアストラルの次元に参入すること。

【ウアリ】 回教における極楽の美女。

第6章

【ミネルヴァ】 ローマ神話で、工芸・芸術・戦術・知恵の女神。ギリシア神話のアテナに相当。

【ケツアル】 中央アメリカ産の、尾が非常に長くて羽の美しい鳥。

【トリベニ】 サンスクリット語で三つの支流が合流するガンジス川の別名。尾骨付近のトリベニからスシュムナー、イダ、ピングアラの三つの気道が始まる。また、ここでクンダリニーが目覚める。

【コスミック・ナイト】 宇宙の夜、プララーヤ (Pralaya)のこと。宇宙は振り子のように昼と夜をくり返す。3 1 1 兆 4 0 億年続く宇宙の昼、マハーマンヴァンタラ(Mahamanvantara)の活動の後、万物は「絶対」に収束する。「絶対」はアイン、アイン・ソフ、アイン・ソフ・アウール（絶対太陽）の三位一体から構成される。

【多面的超視覚(Polivision)】 物体を、前から後ろからも、上からも下からも、同時に一瞬にして完全に見ることのできる客観的知覚能力。

【アグニ】 ヴェーダの火の神

第7章

【ヴェーダ】 インド最古の宗教文献である、バラモン教の根本聖典。インドの宗教、哲学、文学の根源をなすもの。

第8章

【ウィラコッチャ】 インカのマスター。近年ではアーノルド・クルム・ヘラーとしてドイツに存在した。

【アナハタの響き】 「二つのものが触れることなくして生じる音」「打たずして発する音」。

【オルフェウス(Orpheus)】 ギリシア神話で、トラキアの詩人・音楽家。リラ（竖琴）の名手で、その音には野獣も山川草木も聞き惚れたといわれる。

【プレゲトン(Plegethon)】 ギリシア神話。黄泉の国タルタロスを流れる川で、水ではなく火が流れていた。罪人たちはしばしばこの川に投げ込まれた。

【アケロン(Acheron)】 ギリシア神話で、黄泉の国ハデスにある川で、太陽の没する西方にあると考えられた。ここには渡し守カロンがいて、ヘルメス神に案内されてきた死人の霊から銭を取って対岸に渡した。そのために1オボロス銭を死者の口中にふくませる慣わしであった。

【ペヨーテ(Peyote)、ヒクリ(Hikuri)】 メキシコ北部から合衆国テキサス州のメキシコ国境あたりに自生するサボテンの一種で、生食すると極彩色の幻覚を見ることで有名。もともとメキシコの原住民ウイチョル族 (Huichol)な

どによって、宗教儀式の一部として用いられたが、18世紀に入るとアパッチ族にペヨーテを用いる宗教が入り、彼らからアメリカ各地のインディアンに伝えられた。ペヨーテという語はナワトル語のペヨトル(Peyotl)から派生したもの。ウイチョル語では「ヒクリ」とよぶ。

【タラウアマラス】 タラウマラ(Tarahumara)族。メキシコ北西部チワワ州に住む原住民集団。言語はユト・アステカ語族に属するタラウマラ語。人口約5万人。自称「ララムリ」(足の早い人)。居住地はロッキー山脈から南に連なる西シエラマドレ山脈中の起伏のある山岳地帯である。スペイン人のイエズス教宣教師たちにより早くからキリスト教化された。

【サンルイスポトシ】 メキシコ中部の州。人口128万。面積6万km²。

【チワワ】 メキシコ北部の州。人口173万。面積25万km²。チワワ犬で有名。

【チャペルテペック寺院】 メキシコのチャペルテペックの丘の内部にあるが、ヒernasの状態にあり肉眼では見えない。

【ブツマヨ】 アマゾン川の支流。1580km。

【ヤヘ(Yagua)】 ヤシ科の植物。大王椰子(ダイオウヤシ)、その樹皮。

【グアルーモ(Guarumo)】 グワルーモ樹。中米産。やつで的一种。その葉から心臓の葉を採ることで知られている。

第10章

【ダイバダッタ】 堤婆達多。仏陀の従兄弟で有名な弟子の一人であったが、後に反逆して分派を作り、仏陀の法敵になった。

【文化の様々な局面】 退廃的な映画、スポーツ、宣伝、ポルノ、ロック音楽など(広義での黒魔術)。

【ピコ】 Apazote macho。オスのメキシコ茶(おかひじきの類)。

【聖イグナチウス】 St. Ignatius Theophorusのことと思われる。アンチオキアの司教(35? ~110?)。ローマ皇帝トラヤヌス治下、信仰ゆえにローマに連行され野獣による死刑に処せられたが、その途中アジアのキリスト教徒に寄せた書簡など7通は古代の重要文献。祝日2月1日。

【リマ豆】 あおい豆(白いんげんに似た豆で、北米で栽培される)またはライ豆(ペルーの首都リマにちなむ名で、熱帯アメリカ産の平たい食用の豆)。「聖イグナチウスのリマ豆」は不詳。

【アニリン】 “諸聖人の祝日”のパンに用いる砂糖、菓子を着色するもので、鉱物性アニリンとは異なる。

*諸聖人の祝日:11月1日。俗に万聖節とも言われ、天国の死者を祭る。その前夜祭(10月31日夜)がハロウィーン。その翌日(11月2日)が死者の記

念日(万霊節)であり、煉獄にある信徒のために祈る。

【邪眼】 「凶眼」「悪魔の眼」とも訳される。このような気味の悪い目つきによって、作物を枯らしたり、家畜をかたわにしたり、人間の体をしびれさせたり殺したりすることができると考えられている。

【ヒラム・アビフ】 ツロ(ティルス)の青銅の細工人でエルサレム神殿に様々な装飾を制作した。伝説によれば、棟梁(マスター)のヒラムはその特権をうらやんだ三人の職人によって暗殺され後に復活したという。これら三人の職人は、イエスの「三人の裏切者」である大祭司カヤパ(悪意、コーザル体)、ローマ総督ピラト(マインド、メンタル体)、イスカリオテのユダ(欲望、アストラル体)に対応する。我々はこれらの体をクリスト化することにより克服し、マスターとして「復活」しなければならない。

【メドゥーサ】 ギリシア神話で三人姉妹ゴーゴンの一人。頭髮は多数の蛇からなり、その醜怪な姿を正視した者は石に化した。勇士ペルセウスの剣によって斬首された。

第11章

【憑依】 憑依には、Possession(俗に言う「憑依」)、Obsession(「観念的憑依」)の2種類がある。

【ラルヴァ】 生物学の用語で「幼虫」の意。神秘学上では、霊体組織からはみ出た、どこにも所属すべき場所がない、存在の萌芽という意味になる。例えば、罪人が処刑され地面に流された血、自慰や睡眠中にこぼされた精液などが、まがまがしい蒸気のようにたちのぼってラルヴァになるという。つまり、呪われた魂や、無益に消費された生命の種子が有機体の滅びた後まで執拗に存在しつづけようとする時、その怨念、執念がラルヴァとなり、人々を悩ます結果になる。

【エレメンタリー】 メンタル・エネルギーや消費された性エネルギーにより、人工的に創造された生き物。神の意識はない。一方、火の精やエーテルの精などのように神の意識を持つ自然界の精霊を「エレメンタル」という。

【ファンタズマ(Phantasma)】 「幽霊」「亡霊」「幻」と訳される。

【インクブス(Incubus)】 睡眠中の婦女を犯すという男性夢魔。ラテン語のCubは「寝る」の意で、インクブスは「上に寝る者」、スクブスは「下に寝る者」の意。パラケルススは「想像力とは星辰的身体から生ずるもので、肉の交わりにおいては実現されない行為(マスターベーションのこと)である。この孤独な相手のいない愛は、ガス状精液を生み出する素質を持っている。この心霊的精液から女を圧迫するインクブスや、男に挑みかかるスクブスが生まれる」と記している。(パラケルスス著『不可視の病気について』)

【スクブス (Succubus)】 睡眠中の男性と情交するという女の夢魔。

【バシリスク (Basilisc)】 伝説上の爬虫類。アフリカの砂漠に住み、シーッという音であらゆる蛇を遠ざけ、また呼気に触れたり睨まれたりした者は即死したという。

【アスピス (Aspis)】 北アフリカ産の小型の毒蛇。①エジプトコブラ (クレオパトラが自殺に用いたという)。②アスプクサリヘビ (ヨーロッパ産に住むクサリヘビ科の小さい毒蛇)

【フランツ・ハルトマン】 Franz Hartmann。1838～1912。ドイツ人医師、神智学者、秘教学者、錬金術師。著書『バラ十字団の秘密象徴』『智恵の神殿の入口にて』『バラ十字アデプトの館への冒険』『魔術一白と黒』。

【あぎ (Asafoetida)】 阿魏。セリ科の多年草。茎は太く高さ1m、葉は大きく形は人参に似ている。茎から採れるゴム状樹脂を固めたものが咳止め、虫下しなどの薬用として利用されている。イラン・アフガニスタン地方原産。

第12章

【マックス・ハインデル (Max Heindel)】 1865～1919。本名はカール・ルイ・グラスホフ。デンマークの技術者で神秘主義者、秘教学者。1909年にキリスト教神秘主義派の「バラ十字兄弟結社」を創立。

【聖杯】 キリストが最後の晩餐の時に用いた酒杯で、アリマタヤのヨセフがこれにキリストの最後の血を受けたという。後、彼によって英国に運ばれたが不徳の者が近づくとどこかに消え失せた。6世紀ごろのアーサー王は、円卓騎士団を組織してこれを捜し求めたという。

【ヴァルカン (ウルカヌス)】 ローマ神話における鍛冶仕事の神。ギリシア神話のヘパイストスでもある。

【マルス】 軍神アレスのローマ名。ゼウスとヘラの息子。

【ヴィーナス】 ローマ神話における春・花園・豊穡の女神。ギリシア神話における愛と美の女神アフロディーテ。

【アウゲアスの牛小屋】 アウゲアス王は3000頭の牛を飼いながら30年間一度も掃除をしなかったが、ヘラクレスがアルペイオス川の水を逆流させ一日で洗い清めたという (ヘラクレスの第五番目の難行)。

【バガヴァド・ギータ】 サンスクリット語で「神の歌」の意。古代インドの叙事詩マハーバーラタの中にあるクリシュナとアルジュナとの哲学的な会話体の歌。ヒンドゥー教の聖典。賢者ヴィヤーサの著と伝えられる。邦訳『至高者の歌』(竜王文庫)、『バガヴァド・ギータ』(ヴェーダ文庫)

【九門の神聖なる町】 「幸福は九門の町に住む。これを知る者は行動を放棄し、行動に惑わされることも、他人を惑わすこともない」。「九門の町」は人

体であり、九門とは両眼、両鼻孔、両耳孔、口、生殖器官、排泄器官をいう。

【神聖なる処女たち】 炉と炉の火の女神ヴェスタに身を捧げた処女たち。終生 (一説に30年の) 貞潔を誓い、ローマにおける女神の祭壇に燃える不断の聖火を守った4人 (後には6人)。

【第五人種 (アーリア人種)】 現在の人類はアーリア人種と呼ばれ、第五番目の人種である。第一番目: ポーラ人種、第二番目: イーベルポーリア人種、第三番目: レムリア (ムー) 人種、第四番目: アトランティス人種。次の第六番目の人種は、現在すでに隆起しつつある新しい大陸に出現するであろう。

【無原罪の御宿り】 無原罪懐胎 (説)。聖母マリアは、その母の胎内に身ごもった瞬間から原罪を免れていた。祝日12月8日。

【ラーマ】 ヴィシュヌの第六・七・八化身。すなわちバラシュラーマ (斧を持ったラーマ)、ラーマチャンドラ (月のラーマ)、バララーマ (力のラーマ、クリシュナの長兄)。特に第七化身とされる。

【レア (Rhea)】 ギリシア神話で、ゼウスの母。ウラノス (天) とゲー (地) の子で、クロノスの姉で妻。

【シベレス (Cibeles)】 大地自然の女神。フリギア (小アジアの古国) から始まり、AD204 年頃に、ローマに伝わる。マグナ・マテル (Magna Mater 神々の母)、偉大な母とも呼ばれる。

【イシス (Isis)】 古代エジプトで信仰された神々の中で最高の女神。豊穡の大母神。オシリス、イシス、ホルスで三位一体をなす。

第13章

【アカーシャ】 宇宙空間に偏満している精妙な、超感覚的、霊的媒質。宇宙のすべてのでき事がここに記録されている。

【アニマ・ムンディ (Anima mundi)】 第3章「世界霊」の欄参照。

【タットワ】 サンスクリット語で真実、ありのまま、実在の意。万物を支配する五つの根源的力 (エーテル・空気・火・水・土) をいう。

【アーディ (Adi)】 「第一の」「本初」の意。サンスクリット語。

【アラワク族】 南アメリカ及びカリブ海地域の原住民集団。アラワク語族に属する言語を話す数多くの部族の総称。現在ではアマゾン盆地周辺の広い地域に散在。宗教においては病気治療を行うシャーマンが重要。焼畑農耕、狩猟、漁労に従事。

【カンダ】 カンダ・ナーディは人体の72000 のすべてのナーディの基盤で、生殖器と肛門の間、ムラダーラチャクラ上にある卵形のナーディ。生理的には「馬尾」と対応する。(※馬尾: 脊髄下部から下降し、脊髄下方の脊柱管をみたしている脊髄神経根の集合。馬の尾に似ている。)